
ゼロの使い魔～真のガンダールヴ～

カトタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜真のガンダールヴ〜

【Nコード】

N8049N

【作者名】

カトタク

【あらすじ】

2014年、自衛隊は国防軍へ改編された。

それから11年後の2025年。国内最大の輸送機として配備されていたC-5Gシングル輸送機は富士総合火力演習に参加するため、演習場に向かっていた。しかし隣接する野戦空港に着陸する寸前に現れた召喚用ゲートにより、ハルケギニアのルイズのもとに飛ばされてしまう。

機体もろともハルケギニアに召喚されたC-5Gシングルのパイロット、秋本日向は、原作とどこか変わり始めている世界で、原作

より強くなっている平賀才人とともに世界をどう変えていくのだろうか。

一応原作に沿ってはいますが、あり得ない展開になる可能性もあります。

また、性能にかなり無理のある兵器が、多数出てきます。(てか殆どそれです。)

また、作者軍事好きですが、とても中途半端なマニアです。色々おもしろいところがあると思います。

それでもよろしいという方は、どうぞお読みください。

ブログ（前書き）

生徒会のほうは、携帯が親に取られ、更新することができませんでした。

なんとか更新するようになります。

和希さんに影響され、書き始めました。
愚だ具ですが宜しく願います。

ブローグ

富士演習場上空

「こちら国防陸軍富士340輸送攻撃隊所属、C-5Gシングル。演習場内3-17ブロックに着陸許可を要請する。」

『了解。北からの進路をとり、ブロック西に短距離着陸してくれ。』
「了解。」

ここは日本最大の面積を誇る富士演習場である。一昨年憲法9条が改正され、日本の自衛隊は国防軍と名を変えた。その中の富士340輸送隊はその名の通り、輸送任務を請け負うエキスパートである。その要となる、C-5Gシングル。先月配備されたばかりの超大型輸送機である。乗員はわずか1人、その1人に選ばれたのが、日本陸上国防軍富士340輸送隊所属、秋本日向一等陸佐である。元普通科連隊隊長だったが、国防軍への再編とともに異動になったのだ。

「計器異常なし。着陸ポイントに接近。エンジン逆回転用意。全8基・・・異常なし。ポイントまで2キロ。これより着陸態勢に入る。」

『こちらでも確認した。誘道員に気をつけてくれ。』
「了解。」

除所に輸送機は高度を下げ、滑走路ではないが直接地面に着陸するとすぐにエンジンを逆回転させ、およそ700m進んだその時、突然演習場の地面に光る鏡が表れたと思った瞬間、輸送機はそれに飲み込まれてしまった。

そこからそう離れていない観客席で、一人の少年も同じ目に会っていた。

挨拶・・・そしていきなり原作無視

トリステイン魔法学院ヴィエストリの広場
ドッガンー！！

広場に20回目の爆発音が響いた。

「ルイズく。もうよしてくれよ。僕たちの昼食が覚めちゃうじゃないか。」

「そうだぞ！！ゼロのルイズ！！」

「うるさいわね！！次は絶対に成功するんだから！！」

ここでは30名弱の生徒が集まり、2年生進級のための使い魔召喚の儀式が行われている。最後に残った桃色のブロンドの少女・・・ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールはもう1時間も儀式を行っているが、どうにも使い魔が召喚されない。しびれを切らしたのか、数人の生徒が儀式をやめさせようとした。そこで頭の禿げた長身の男・・・コルベール教授が間に入った。

「ミス・ヴァリエール。悪いが儀式はここで終わらせてもらう。1年生からやり直してもう一度チャレンジしなさい。」

ルイズはそれだけは避けたかった。そうでないと、次からは本当にヴァリエール家に見放されてしまう。

「お願いです。先生。もう一度、もう一度だけでいいですからチャンスを下さい！！！！お願いします！！」

コルベールは少し考えた後、うなずいた。

「ではもう一度だけやらせてあげましょう。失敗したら留年ですぞ。」

「ありがとうございます！！」
ルイズは精神力を振り絞った。

せつかくもらった最後のチャンスだ。ブリミル様！成功させてください！！

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァ

リエール。宇宙のどこかにいる我が僕よ、この呼び出しに答え、ここに我が使い魔と成せ！！！」
ズゴオオオオン！！！」

先ほどまでとは比べ物にならないほどの爆発が起きた。

また・・・失敗した・・・もうこれまでね・・・。

「おい！なにがいるぞ!？」

その声にルイズははっと顔を上げる。爆発の煙はまだはれていないが、その先に何か巨大なものが見えた。長さは80メートルぐらいだろうか。巨大な影は、爆発の煙が晴れるとその全貌が現れた。

色は灰色、巨大な翼があるので竜かと思ったがそれは根元で固定されているらしく、羽ばたけないので違うのだろう。何より生き物の気配が感じられない。

ふと足元を見てみると、青く見たことのない少年が気絶していた・・・。

巨体の正体は日向が操縦するC・5Gシングル戦闘輸送機であった。そのころ、日向はというと・・・

C・5Gシングル機内

な、なにがおこった!?!ここはどこだ!?!

コックピットから見える景色にただただ驚いていた。だが、そこにたたずむ一人の少女と、横たわる少年を見たとき、日向は完全に自分の身に起きたことを理解した。

ゼロの使い魔の世界に召喚された・・・しかも陸軍のフル装備で・・・。

しばし呆然としていた日向だったが、不意に

「アーリイ?生きてるか?」

「はい。大丈夫です。システムも全てグリーンです。」

この声はというと、C・5Gシングルに搭載された試作型人工知能である。

もともとこの輸送機を一人で操縦するなど無理なことなので、日向

のサポーターとして組み込まれた機能である。プログラムされたものではあるが、かなり優秀な知能で、人間と対等に話すことができるのである。この輸送機の意味でもあるため、無人でも日向が頼めば離陸、航行、着陸まで全て出来る、つまりは万能なのである。

「セキユリティを最大レベルまで上げてくれ。俺以外は絶対に中に入れないように。」

『了解です』

「さてと。挨拶してくるか。」

日向はそういつと輸送機から外へと踏み出した。

ヴィエストリの広場

「ルイズ！平民を召喚したのか？さすがゼロのルイズだな！」

ルイズは屈辱に耐えながらも、どこか安心していた。

「やっと出てきてくれた。でも平民・・・あーもう！！なんでよ！！」

訂正・・・やつぱ怒ってました。

「ん・・・んん？」

青い服の少年・・・平賀才人が目を覚ました。

「あれ・・・？ここは？」

「アンタ誰？」

「いや・・・こっちが聞きたいんだけど・・・。」

「アンタ使い魔なんだか「使い魔だろうと何だろうと普通は自分から名乗るだろう。」うるさいわね！！ご主人に向かって何よその口は！！」

そう言い当っていると今度は緑や茶色を「ごちゃごちゃ」に混ぜたような服を着た精悍な男がやってきた。

「何やってるんだね？」

「アンタも誰よ！！なんで私の使い魔は二人とも平民なのよ！！」

あとから来た男が眉をひそめた。

「君には悪いがこっちは演習中にいきなり飛ばされたんだ。その言

葉はひどいと思うぞ？」

「え？演習つてもしかして富士総合火力演習ですか？」
思わぬところから声がかかった。

「え？あ、そうだが。演習地にあの輸送機を着陸させようとしたらいきなりここに飛ばされた。君は？」

「やっぱり。俺は平賀才人です。演習を観客席で見てたら輸送機がいきなり光に飲み込まれたのを見たら、俺も同じようになって・・・」

「そうだったのか！！いや仲間がいて良かった！！俺は秋本日向だ。日向でいいぞ。よろしく。」

「あ、俺も才人でいいです。よろしく。」

「ちよつと！！私を空気にしないでよ！！！」

すっかり忘れられたルイズは怒っていた・・・。

そのあとコントラクト・サーヴァントをして（才人は動転していたが）ガンダールヴのルーンが刻まれ（才人は悶えていたが）コルベールにルーンをメモされ他の生徒はフライで飛んで行った。

「ルイズ、才人、ちよつといいか。」

まずは二人を呼び止め、俺と才人の事情を説明・・・

「そんなの信じられるわけじゃない！！もう知らない！！！」

そう一蹴され、置いていかれてしまった。

「はあく。どうしょ・・・。」

広い広場に、二人の嘆きが響いて行った。

武器庫（前書き）

10月22日、武器庫に改装しました。

本編に新しい兵器が登場するたびに、詳細を書き込みます。

最終更新 7月11日

武器庫

C-5G シングル (超大型強襲輸送機)

乗員 1名 (最大687人)

機関 GE TF59ターボファンエンジン (19,500kg)
× 8基

全長 80m

全幅 71m

全高 8m

最大速度 920 km/h マツハ0.79 (496kt)

500 knots . 570 mph ()

巡航速度 440kt マツハ0.77

実用上昇限度 10,895m

最大航続距離 2万5800?

最大積載量 350t

武装 旋回式20mmチェーンガン×12基

ミサイルなど16発

サポーターとして人工知能を備えた超大型輸送機。

ベースは米軍のC-5ギャラクシーで、エンジンが8基に増設されている。

片翼4基のエンジンの間に2基ずつミサイルパイロンがあり、対空または対地(対艦)攻撃が可能。機体底部に8基、上部に4基の旋回式チェーンガンが装備、各個にカメラ、赤外線カメラ、レーダー、サーモグラフィが搭載され、人工知能の判断に基づき、射撃できる。また、限定的な不整地着陸能力があり、作中の平原くらいならば着陸できる。

現実には存在しない。

24式自動小銃

全長	922 mm
重量	3200 g (弾倉除く)
口径	5.56 mm
使用弾	89式5.56 mm普通弾
発射速度	560 700 発/分
有効射程	760 m
装弾数	34 発

89式自動小銃の後継。

300 g 軽量化され、装弾数も34発、射程が約760 mと性能が上がったが、その分発射速度が最高700発まで下がった。

ダットサイトやフラッシュライト、スコープ、グレネードランチャーなどのアクセサリを追加可能で、今回ハルケギニアに飛ばされたのはグレネードランチャーを除くすべてのアクセサリが装着されたもの。

現実には存在しない。

三式閃光弾

全長	3.5 m
直径	38.88 cm
重量	520.27 kg
速度	800 km/h
弾頭	270 kg
射程	70 km

内部に996個のマグネシウム発火弾を内蔵し、広範囲のヘリや飛行機の操縦者を無力化し、航空機の墜落を誘発させる結構残酷な兵

器。ただし使用の際は、自分も目をつぶらなければならぬ。しつこいマスコミのへりに使われたという逸話がある。(という設定)戦艦大和に搭載された三式弾から命名。現実には存在しない。

9?拳銃

全長 206mm

重量 830g

口径 9mm

使用弾薬 9mmパラベラム弾

発射速度 40発/分

有効射程 約30~50m

装弾数 9発

1982年に採用された自動拳銃。ドイツのザウエル&amp;イン社が開発したSIG SAUER P220を、新中央工業(現:ミネベア)がライセンス生産したもの。現実(2010年現在)に存在し、配備されている。

2号・5号迷彩服

2号は冬季・夏季共通の迷彩服で、内部の布を引き出した状態が冬季用である。

おもに普通科普通隊員が着用し、迷彩服自体に弾倉・手榴弾をある程度装備できるようになっている。

全体が緑、茶、黄土のまだらになっている。

5号は冬季にはあまり向かない薄い迷彩服である。おもに強襲隊や偵察兵が着用し、機動性や視認のしづらさに重点が置かれている。

全体的に暗い緑で統一されている。

これらは現実にまったく存在しない迷彩服である。

24式戦闘糧食

1食約500gの缶入り糧食である。

鳥肉の照り焼き丼、牛丼、豚肉の生姜焼き飯、五目飯、ただの白米、の5種類がある。

下手なコンビニ弁当よりおいしい。

温めるとさらにおいしい。

人気は鳥肉の照り焼き丼。

現実には存在しないが、家庭やコンビニ、レストランでおなじみの味である。ちなみに兵器ではない。

iphone5GS

才人の持っていた携帯電話。

iphoneの第5.5世代目に当たる機種である。

高解像度3D対応Retinaディスプレイ装備。

最大連続通話時間 20時間

最大連続待受時間 300時間

オーディオ再生 95時間

ビデオ再生 55時間

内蔵メモリ 80GB

厚さ 5mm

横幅 5.8cm

奥行き 11.5cm

ディスプレイには炭素繊維を極限まで圧縮し、透明にされたものをNLG 112という防弾ガラスの一種のタッチパネル用に改良したものにコーティングすることで象に踏まれても（理論上は15tまでの衝撃に対応）壊れない携帯電話というiphone市場初め

て、対ショック構造で製造された。ディスプレイ以外はC-5（この作品中の）にも使用されているカーボン素材で作られている。衛星があれば、半径約50km以内との通信ができるが、衛星がなくなると2km以内に激減する。作中では、C-5を電波中継局としてC-5から半径2km以内にいれば、C-5から半径30kmとの通信ができる。

一部軍用に採用する国があり、日本も個人携行情報統制機器として一部使用している。

現実には存在しないが、4Gまでなら出ている。ちなみに兵器ではない。

21式高機動装甲戦闘車

全長	5・21m
全幅	2・15m
全高	2・45m
重量	3・7t
乗員	9名
兵装	固定武装 7・62mm車載機関銃 2基
	追加武装 M134ミニガン又はM2キャリバー 2基
	4連装対戦車・対舟艇ミサイルランチャー 2基

固定武装として車載機関銃をヘッドライト横に1基つつ搭載し、車両上部にあるリモートウエポンステーション（RWS）にM134、又はM2を搭載可能。

4輪駆動車で、装甲戦闘車（FV）となっているが、厳密には高機動車（HMV）の位置づけである。

車両内部の助手席に当たるところに、RWSの指揮装置一式が搭載され、簡易C4Iによるデータリンクが可能である。

実際に存在しない。

ルイズの説得（前書き）

不定期更新です。

ルイズの説得

ルイズにおいてきぼりにされたあと、俺は才人にシングルの積載物の調査を手伝ってもらったことにした。

『そこを動かさないください』

「え？何だ？」

「あ、悪い。アーリイ、こいつは通していいぞ。」

『申し訳ありません』

危うくセキュリティーによって才人がレーザーで細切れになるとこだった。

才人は混乱していたがこの輸送機に組み込まれた人工知能だと説明すると納得してくれた。そしてセキュリティーを抜けると・・・

「おおっ！！90式改に21式重装甲高速高機動車に17式強襲バイクだ！！あ！これは・・・（以後省略）」

こいつは軍オタだったっけ？まあ説明する手間が省ける。

「才人！！これもつとけ。」

そういつて渡したのは5号迷彩服とマガジンベストに24式自動小銃、9？拳銃とそのマガジンだ。

「いいんですか？こんなもの一般人に渡して・・・？」

「ああ。この世界は魔法が存在するからな。いろんなものがあるかもしれないな。」

「ありがとうございます！！」

才人の目が輝いている。

「手入れの仕方はわかるかな？」

「はい。これぐらいなら。」

ん？これぐらい？ゼロの使い魔読んだことあるのかな？

「あゝ、そのルーンがあれば大概の武器は扱えるぞ？」

「へ？なんで？」

あれ？ないのか・・・ま、しょうがないか。

「それはだな・・・(説明中)・・・ってことだ。」

「へへ便利なルーンもあるんだな・・・。ってなんで日向がそんなこと知ってるんだ？」

「それは・・・(説明中)・・・なんだ。」

俺はこの世界がライトノベルで出版されていること、アニメもあること、イコールこれから事を知っていること、そしてこれから起きることを話した。めんどいので大まかにしたが・・・。

「ふーん。」

あれ？反応が以外と薄いな・・・。

「なんか・・・友達が言っていたような・・・。」

「まあ、最初のイベントは明日のギーシュとの決闘だからな。それが終われば親友になれるから頑張ろうぜ。」

「ああ。」

「じゃあテント張っちまおうか。」

「おお。」

Side ルイズ

あのヒュウガとサイトとかいう使い魔に自分たちは違う世界から来たと言われた時、あまりの非常識さに二人を振り切って部屋に戻ってしまった。あの話は本当なのだろうか。それにあの巨大な物体の正体を聞いてないし・・・。

ああもう！！あいつたちは私ぼ部屋を知らないしどっちにしろ迎えにいかないとならないじゃない！！

はあく。お母様になんて説明したらいいのかしら・・・。

ルイズはトボトボと外に出て行った。

Side out

「そこ引っ張って。そうそう。よし、完成。」

テントを立て終わった俺と才人はテントの中で銃の手入れをしてい

た。

ただの手入れではない。ガンダールヴのルーンを最大活用した超高速メンテナンスである。

「これで！終わりだあ！！」

「くそ！！また負けた！！」

「ふふふ。本職なめんなよ？」

「こつちも一応本職なんだけどな・・・。」

才人がなんか言っていたが聞こえなかった。そろそろルイズ説得に行くか。

「才人。そろそろルイズが来るぞ。」

「え？」

「何よこれ！？」

ルイズがテントを見て驚いている。

「よおルイズ。俺たちの話、信じる気になったか？」

「話だけじゃ信じられないわ。証拠を見せなさい！！」

俺は携帯電話を取り出そうとする才人をとめて、耳打ちした。

「おい。今使えないものを出してもしょうがないから俺の無線機を使おう。」

「ああ。そうだな。」

「ルイズ。これ持つてろ。」

俺は無線機をルイズに持たせると少し離れたところまで行き、通信した。

『おい。聞こえるか？』

「聞こえるけどこんなマジックアイテム持つてる人は持つてるわよ。」

「チツ。そうだったか。よし。ルイズ。お前連射出来る銃って知ってるか？」

「知らないわよそんなの。弾を込めるのに時間がかかるわよ。」

『よし才人。24式1マガジン分フルオートで撃つたれ！！』

「はいよ。」

・・・ジャキツ

初弾を装填するとルイズがおもしろくなさそうに見ていた。

「才人、あの木の根元に向けて撃つてくれ。」

500メートルほど離れた木の根元である。この世界なら絶対に当たらない距離である。ルイズもそう思っていた。しかし24式の射程は760mである。これぐらいの距離なら楽勝である。

ズダダダダダダダダダダッ

45発の弾丸が毎秒700発の勢いで吐き出され、木に大きな穴をあけた。

ルイズは弾の連射速度に驚き、その射程に驚き、その威力に驚いて、半ば呆然としていた。

「どうだ。信じたか？」

二人のそばに戻った俺はルイズに聞いてやった。

「え、ええ。し、信じてあげるわ・・・。」

ルイズはくやくしく思いながらも、信じるしかなかった。

ルイズの説得（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしてます！

物語が途中で切れてしまっていました。

すみません・・・。

そして鬼龍皇さん、ご指摘ありがとうございました。

これからもよろしくです。

C・5Gシングル 異世界初飛行(前書き)

次回の前触れです

ではどうも。

C・5G シングル 異世界初飛行

「あと2時間です。出発だぞ。いいか？」

「ああ。そういえば今日の使い魔召喚の儀式で生徒の一人が巨大な竜らしきものを召喚したらしいぞ？大丈夫なのか？」

「たとえ巨大だろうとたった一匹。あの数の竜にかかれば殲滅出来る。それに我々の目的はあくまで魔法学院だ。そんなの相手にしなくともいい。」

「そうか。では作戦開始だな。ククククツ。」

「それで、あの竜みたいなのはヒコウキっていう空飛ぶ機械であんな達はそれを操っていたというわけ？」

「ああ。あ、でも才人は学生であってあれは操縦なんてしたことないけどな。」

俺たちは今、ルイズの部屋で、異世界から来たことを詳しく説明していた。銃を撃つたことでようやく話を聞いてもらえるようになり、地球には魔法がないこと、代わりに科学というものが発達していること、その最先端がああ飛行機だということ。さすがにこの世界は俺たちの世界でライトノベルとして出版されています。とは言えないので黙っている。

「でも翼が動かないのに飛べるわけ無いじゃない。」

「やっぱり言葉だけじゃ理解できないか。」

「じゃ、実際に飛んでみるか。才人、手伝え。」

「え？人工知能があるじゃ。ルイズに人工知能の事を教えてみる。」

「あつちでも魔法っぽいのにこつちじゃ完全に魔法だろうが。」

「そうか。」

「ルイズ、行くぞ。」

ルイズはそんな無駄だとも言いたげに、渋々ついてきた。

「やっぱり飛ぶわけ無いと思うけど。」

「早く乗れよ。」

ルイズにはまだ格納庫の戦車や何やらを見せるわけにはいかないの
で、コックピット後部の要人専用席に座ってもらった。ルイズと言
えばその座り心地に驚いていたが。

「アーリィ。俺がいいというまでしゃべらないでくれ。返事もしな
くていいぞ。」

『……………』

操縦桿を握ると機体の状態が頭に流れ込んできた。ガンダールヴっ
て便利だよな……………アーリィが不機嫌なのも分かった。

「電源接続。」

電源を入れ、しばらくすると様々な電子機器に光がともった。

「何よこれ。どうなってるの?」

「好奇心旺盛なのはわかるがしばらく黙っててくれ。」

「……………」

まずい。怒らせたか? ま、いいか。

「レーダー、外部カメラ異常なし。各部……………異常なし。メイン燃
料タンク、エンジン接続。全エンジン始動。才人は武装面のチェツ
クを頼む。」

「了解。えーっと20? チェーイングン12基、異常なし。ミサイル
も異常なし。」

「前後部ハッチ閉鎖。エンジン圧力異常なし。西向きの滑走にて上
昇。C-5G シングル、離陸。」

車輪が回転し始め、一定の速度、風速になったところで、ぐらりと
した浮遊感とともに450tの巨体が宙に浮いた。

「高度3000まで上昇後、900km/hで魔法学院周回後、離
陸地点に着陸する。っていうかこの説明必要無くない?」

「俺もそう思った……………」

この機体は、原作のゼロ戦とは違い、かなりの大型だったが、一応

戦闘攻撃機である。でかい図体に似合わない機動力で飛んでくれた。
「どうだルイズ。信じたか？」

「・・・何よ。何なのよ。なんで竜より速いのよ！！なんで竜より高く飛べるのよ！！魔法も使っていないのに。」

「そりゃやっぱ科学と魔法の違いでしょ。」

「あんたねえ！！魔法を馬『生体レーダー』に反応があります。総数200。450km/hで魔法学院に接近！！』何なのこの声。どこから・・・。」

「アーリイ・・・。喋るなって言っただろ？」

『だって私の事相手にしてくれないから・・・。』

これ本当に最新鋭の人工知能かよ・・・。

「こっちは高度3500にいるからみえないだろ。でもなんでこんな数で魔法学院に？」

「わからないわ。」

『監視を続けます。』

「ねえ！！これ何なの！？もしかして魔法なの！？」

「まったく・・・。これだから面倒なんだ。これはな・・・（説明中）
・・・なんだ。」

ルイズに人工知能について教えた。

「はあく。あんた達の世界じゃ頭脳まで科学で作れちゃうのね・・・。もついいわ。信じてあげる。」

そう言われ、安心した時、それは起きた。

『先ほどの竜が、魔法学院を攻撃し始めました！！』

こんなの原作にはなかったぞ！

C・5G シングル 異世界初飛行（後書き）

えーっと、短くてすみません。

今回はちょっとした戦闘になります。

来週は文化祭があるので、無理かもしれませんが。

ではまた次回に……。

竜騎士襲撃（前書き）

今日祝日なの忘れてました。
書いてみたのでどうぞ。

竜騎士襲撃

「ヒュウガ!! どうするのよ!!」

「どうするってたって攻撃するしかないだろ。」

日向の頭が戦闘モードに切り替わる。

「対空戦闘用意!! 武装安全ロック解除。攻撃コード19425。」

チエーンガンアイリンクシステム接続。」

首を動かして接続を確認する。

「接続確認。1から8番チエーンガンにて射撃開始!! 才人!!」

・特に何もするな!!」

ズルッ

「だったらそんな怒鳴るなよ……。」

『射撃開始します。』

Side other 1時間前

「オスマン学院長!! これを見てください!!」

「なんじゃ騒々しい。」

学院長室に急ぎ足で駆け込んできた長身で禿げ頭の男はジャン・コルベール。「炎蛇」のコルベールである。それに対し、立派な執務机に腰かけているのは、オールド・オスマンだ。300歳とも400歳ともいわれるこの爺はこの学校の最高権力者である。

「これを見てください!!」

コルベールが見せたのは始祖ブリミルのところに書かれた書物で、学院の中では最古の書物である。その開いた紙の中に浮かんでいたのはルーンだった。

ガンダールヴ、ヴィンダールヴ、ミヨズニトルン、...

・そして ヴァンドゥールヴ。

「これは?」

オスマンは急に険しい顔になる。実は先ほどコルベールからヴァリ

エールの娘が平民を二人と巨大な竜を召喚したと聞いたのである。それを受け、オスマンは早急な調査をコルベールに命じたのだ。

「ミス・ヴァリエールが召喚した使い魔のルーンです。少年がガンドールヴ、青年が・・・ヴァンドウールヴでした・・・。」

「そうか・・・。ついに虚無の担い手が揃ってしまったか。ガリアのジョセフにロマリアのヴィットーリオ、あとアルビオンの森の中の少女・・・。それにヴァリエールの娘、ミス・ルイズ。この話は本人には絶対に言うな。時が来れば分かる。もっともそれはそう遅くないときに来るが・・・。使い魔には話してあげてやってくれ。」

「分かりました。」

そういつてコルベールが去った後、オスマンは考えていた。

たぶん今日あたりにウィスコン武装集団が攻めてくるだろう。

神の左手ガンドールヴ、全ての軍の管理神ヴァンドウールヴ、そして虚無の担い手が今ここにいるのだから。

ドウオオオオン！！

来たか・・・。

私はオールド・オスマンにルーンの調査を報告した後、職員室に向かった。職員は全て、オスマンからの話を聞いて、すでに戦闘態勢を整えている。

この学校には元軍人が2人いる。

1人は私、コルベール。2人目がギトー。風のスクウェアで風紋隊の隊員だったらしい。

「どうするのですか。ミスタ・コルベール。」

「生徒を地下に避難させ、学院防衛の意思のあるものは食堂に集めるようにしてください。ミス・ヴァリエールは部屋の中にいるはずです。ミス・シュブルーズ。彼女達を誘導してください。」

「分かりました。」

集まっていた教師たちに手早く指示すると、私はギトーとともに食堂に向かった。その途中、とんでもないものを見てしまった。

先ほどミス・ヴァリエールが召喚した巨大な竜……。のようなものが羽を飛ばたかせることなく、翼から青白い炎を噴き出しながら低い音を発し、滑走して上昇したのだ。それは、普通では考えられないような高さまで上昇すると遠目には分かりづらいが、これもありえないような高速で、学院の周りを回り始めた。

儀式の際に、ディテイクトマジックをかけていたが、あれはマジックアイテムでも生き物でもないものだったのだ。そんなものが竜を超える高さで、竜を超える速さで空を飛ぶなど、あり得ることなのだろうか。かすかにくすぐられる私の好奇心だったが、今はそれどころではない。何としてもこの学院を守らなければ……。

「いいか！！この学校に虚無の担い手がいるのは確かだ！！残念ながら誰だかは特定できなかったが。それゆえ、確実にあの学院を壊滅させるのだ！！」

「ハッ！！」

「作戦は南上空から全騎急降下突撃し、出来るだけ攻撃してから上昇、再び急降下して攻撃。この繰り返しで行う。もし巨大な竜を見つけた場合は攻撃しなくてもいい。攻撃されたら止むをえない場合交戦を許す。それ以外は学院攻略を最優先としろ！！いいな！！」

「ハッ！！」

ウイスコン武装集団。始祖ブリミルの信仰を拒否し、虚無による戦争を回避しようと、様々な場所にスパイを送り、要注意人物の観察をしている軍隊並みの規模を持つ集団である。数ヶ月前、トリステイン魔法学院に送り込んだスパイから、この学院中に虚無がいるとの情報が回ってきたのである。だが最悪なことに、連絡を受けている途中、そのスパイは町の衛兵に持っていた違法なマジックアイテム

ムの出所を問われ、そのまま御用となってしまう、肝心な生徒の名前を聞き出せなかったのである。当初、学院を強襲する案は罪のない生徒たちを犠牲にしまうということと反対されていたのだが、時間がたつにつれ、考えが変わり始め、結局虚無の担い手がいると思われる現1年生の使い魔召喚の儀式に合わせ、この作戦を実行することになったのだ。実行部隊は、傭兵時代に実績を多く挙げたものをはじめ、各国軍隊から引き抜いたベテランを組み合わせ、失敗の要素などみじんもない部隊になった。

「さて。せいぜい抗ってみろ。」

「見えたぞ!!」
生徒の一人が空を指差し叫ぶ。

ここはヴェイエストリの広場。ここに集まった交戦意思のある生徒たちは全員手に杖を持っている。

「まだ、魔法の射程に入っていません。むやみに魔法を使つてはなりませんぞ!!」

コルベールも杖を構え、攻撃の間を探っている。

と、そういう間に竜騎士たちが急降下を始めた。と、思う間に魔法攻撃が飛んでくる。

「エア・シールド!!」

「アイス・シャベリン!!」

「短SAM発射始め!!」

「エア・ニードル!!」

一部なんか違う声したが、生徒たちが反撃を試みる。

しかし……

パシュツパシュツ

騎士たちは鎧を着ていて、生徒の魔法では、あまり効果が無い。一部トライアングルやラインや特化型のドットは何騎か落としていたが……。

だが敵は150以上。数騎落としただけでは話にならない。

もたもたしている間に学院が攻撃され始めた。地下には生徒が避難している。絶対にここを突破されてはならない!!

しかし敵は無情にも減る様子が無い。何とか!!しなければ!!

・・・グウオオオオオオオン

そこに近づいてきた聞きなれない・・・いやついさつき聞いた音・・・。

ゆっくりと首を動かすと、高速で近づく灰色の巨体が目に映った。

Side out

『目標200騎の内25騎をロック。』

「よし。射撃開始!!」

ズドドドドツ　ズドドツ　ズドドドドドドドドドドドドドドツ

操縦桿の射撃スイッチを絞り、フロントガラスに合成されたレーダーと肉眼での間隔を頼りに竜を撃ち落としていく。

一気に25騎をたたき落としたが、やはり数が多い。弾もあまり無駄には使えないのだ。

『前方に気圧の部分的変化を探知。回避行動に入ってください。』
フロントガラスに着色された空気の塊が投影される。

やけに鋭い側面だな・・・刀みたいだ。

そう考えている場合ではないが、そう考えてしまう形状だ。

じつはこれは竜騎士の一人が放ったエア・カッターなのだが、それをまだ日向は知らない。

『気圧塊の霧散を確認。』

「今のはなんだ?つにしても数が多い。アレを使うか。」

戦闘機相手ならミサイルを使えるのだが、あれは人間や生き物に直接撃つていいものではない。だから今はある物を使うことにする。

三式閃光弾。

これは強烈な閃光を発生させて、航空機の操縦者の意識を落とす、墜落を誘発させる兵器だ。新型なので積み荷リストに記載されていない

なかったが、さっきの才人との整理の時に見つけ、ミサイルパイロ
ンに装備しておいたのだ。

三式閃光弾。目標竜騎士168機。発射!! 目をつぶれ!!」

こいつの欠点は使用する際は自分も目をつぶらないと使用できない
ことなのだが、C-5のコックピットはその必要がないように一定
の光量以上は入らないように遮断してくれるので、安心だ。

シュゴオオオオ

パイロンから三式弾が切り離され、直後固形燃料に点火し白い尾を
残して竜騎士の集団へ、飛び込んで行った。・・・そして数秒後・

・
シュバババババツ

弾頭が爆発し、強烈な光と音が竜騎士を襲った。

竜騎士襲撃（後書き）

うーん

あまり現代兵器としてのすごさが分からなくなってしまうました・・

。。
戦闘としてはあまりおもしろくなかったと思います。
すみません・・・。

PVが10000を超えました。

読んでいただき、ありがとうございます。

これからもよろしく願います。

ご意見、ご感想もお待ちします。

竜騎士襲撃 2 (前書き)

皆さんお久しぶりです。

やっとテストが終わりました!!・・・っと思ったら、約一週間後に進級に関する模試が・・・。
次の更新はいつになるやら・・・

PVが20000を超えました。ありがとうございます。

ではごっごぞー!!

竜騎士襲撃 2

Side 竜騎士

魔法学院の上空に到着した。攻撃部隊だろうか、広場に多数の少年少女と大人が見える。だが、そんなこともあるのかと、装甲騎士団用の鎧を着用している。チームワークも悪くないし、一人ひとりの力量はスクウエアにとどくくらいだ。あれぐらいの防衛網、何でもないわ！！

・・・と思っていた時期も私にはありました。攻撃を開始したとたん5騎が落とされ、その後も攻撃の雨で3騎が負傷した。

この鎧はもつとも丈夫なものではなかったのか！？

実はこの鎧は竜のブレスの防御に特化した鎧だということをこの竜騎士は知らない。

だが結局魔法で落とされたのは多くても15騎。150騎もあればこの作戦は成功する。

再び攻撃態勢に戻り、此方の有利を確認した時、ソレは聞こえてきた。

……グオオオオオオオオン

聞きなれない音を耳にし、後ろを振り返る。

竜がいる。だが、これが竜といえるのだろうか。

情報にはあった。生徒の一人が巨大な竜を召喚したと。だが・・・これは・・・。

何人かの部下がブレスと魔法による攻撃を試みている。だが質量差がありすぎて対処できない。しかも竜が羽ばたく様子は無い。なの

に、飛ぶだと？

ズダダダダダッ ズダダッ ズダダダダダッ

竜の腹が光ったかと思うと、すぐ隣の部下がズタズタになって落ちていく。

私も半ばやけになってエア・カッターを撃つ。なのに・・・“避ける”だと・・・!？

何だあの素早さは・・・。

一時上空に集合、散開、各個攻撃に移る。仲間都合図をして上昇する。

作戦前に交戦はなるべくしないと言ってしまったが、この竜をほおっておくことは出来ない。何とか落とさなければ・・・。ついてくるか後ろを見たとき、竜の翼から細長い筒のようなものが炎を噴き出しながら此方に飛んできた・・・そして強烈な光が・・・。私の意識はそこで途絶えた。

Side out

Side コルベール

まさかあの鉄の鳥があんな短時間で200もの竜騎士を落としてしまつとは・・・。

しかも落ちてきた竜騎士が全員失神状態だとは・・・。後でゆっくり話をしなければ。

そう思う私の前には失神した竜騎士を捕縛する生徒たちと、戦いを終えて降りてくる鉄の鳥が見えるのだった。

Side out

『全騎撃墜を確認。戦闘を継続しますか?』

「現時点を持って戦闘を終了する。学院ぎりぎりに駐機できるように滑空して着陸してくれ。」

『了解』

攻撃コードを入力してからわずか5分で決着がついた。

「なあ、日向。」

「ん？なんだ？」

才人が少し顔をこわばらせて話しかけてきた。

「さっきのつて、全部殺しちゃったのか？」

ああ、そういえばこいつはさっきまで戦争を知らない一般人だったんだよな…。

「いや、あれは音響閃光手榴弾みたいなもんだ。最初の25人は分からないが、残りは失神してるだけだぞ。」

それを聞いて才人の顔が和らぐ。

「ああ、第二次日中戦争でテレビ局のヘリに使ってたやつか？」

「いや、今のはその30倍ぐらいの威力がある。」

「30倍つて…。」

あれ？そついやルイズは？

・・・失神してました。まあ、これまで竜に乗ってきた女の子が、この機動に耐えられるわけ無いか。

車輪が接地する振動が伝わる。そして数十秒後、機体は完全に停止した。

「全エンジン停止。火器管制システム全ロック。燃料タンク接続

解除。電源ダウン。」

『電源ダウン。スリープに入ります。』

「才人、ルイズを頼む。部屋に運んだら、もう一回此処に戻ってきてくれ。」

「分かった。」

俺はその間にコルベールとオスマンとの交渉を取り付けないと。

機体から降りると、さっそくコルベールを探そうとしたが、その必要はないようだった。

「君!!」

機体を降ろしたところからすぐ横の校門で、禿げた長身の男が、俺を呼び止めた。

「あ、コルベール先生。ちょうど良かった。少し話したい事があったので。」

言ってからしまったと思った。相手は俺の名前を知らない。俺も相手を知らないはずなんだ。

「なぜ私の名前を知っているのかね？」

コルベールが眉をひそめる。

「あ、いえ、ルイズから教えてもらったので。」

何とか切り返す。相手も納得したようだった。

「ところで君は？」

「あ、はい。日本国陸上国防軍富士340輸送隊所属、秋本日向一等陸佐です。って言っても分からないですよね？名前はヒュウガでいいです。」

「ええ。全然分かりません。でも君は軍人なんだね？」

「はい。もともとは普通科連隊の隊長をしていました。」

相手には全く分からない単語の羅列だろうが、そこを印象づけておけば後々有利だ。

「隊長か……。まあいい。学院長や他の教員が君たちに会いたがっている。ついてきてくれ。」

「ちょっと待って下さい。もう一人がルイズを部屋に運んでいるんです。」

「ええ。いいですよ。暇つぶしと言っては何ですがこの鉄の鳥の仕組みを教えてくださいかい？」

「ああ、はい。」

コルベールに説明を頼まれ、簡単に説明していると才人が戻ってきた。

「おお才人。来たか。」

「君の名前は？」

「ああ、俺は平賀才人です。サイトでいいですよ。」

「サイト君だね。よろしく。」

「じゃあ先生、行きましようか。」

「そうだな。またあとでこのヒコウキとやらの説明をしてもらいたいな。」

先生・・・目が輝き過ぎて俺にはまぶしい・・・。ついでに頭も・・・。

若干コルベールの好奇心に引きながらもオスマンのいるところへと向かう。

ついた先は学院長室だった。

「失礼します。ミス・ヴァリエールの使い魔たちを連れてきました。」

「入りなさい。」

コルベールに続き部屋に入ると20人ほどの男女がいた。たぶん学院の教師達だろう。

「君たちがミス・ヴァリエールの使い魔かね？私はこの学院の学院長、オールド・オスマンじゃ。オスマンとでも呼んでくれ。」

「はい。私は日本国陸上国防軍第一第二混成師団富士340輸送隊長、秋本日向一等陸佐です。軍人です。ヒユウガと呼んでください。」

「俺は東京都無島高等学校第3地区学生自衛部隊第一小隊長、平賀才人三等学尉です。ヒユウガと比べたら、まだまだ未熟ですが、一応軍人です。サイトと読んでください。」

この話は教師陣だけでなく俺も驚いた。才人が学生部隊とは言え、れっきとした軍人だったとは・・・。

でもルイズが二人の軍人を呼び出すなんてなあ・・・。ここは本当に俺の知ってる世界なのか？

二人が名乗った後、ヒュウガの交渉が始まる。

竜騎士襲撃 2 (後書き)

新しい話を書く時間がないと思うので、すでに投稿されている部分を順次改装していきます。時間があつたら、読み返すのもいいかと思えます。

ではまた次回!!

ご意見・ご感想お待ちしております!!

話、その後装備（前書き）

やっと全テスト行程が完了しました。

なんかもつ原作なんかそっちのけですけど・・・

どうぞ。

話、その後装備

「まずは君たちにお礼がしたい。あの戦闘のとき、我々は圧倒的に不利じゃった。そこに君たちがやってきてくれた。ありがとう。」

原作で見る貴族に比べ、オスマン学院長は器が違うと思っていたが、まさにその通りだった。公爵家の使い魔であるとしても平民である俺たちに素直なお礼をしてくれるとは……。

「いえいえ……。戦闘に介入することぐらいしか俺には出来ないので……。」

才人はいろんなことが出来るだろうが俺にはこれぐらいしか出来ないだろう。

「そうではないと思うよ、ヒュウガ君。……ところでヒュウガ君、サイト君。君たちにはお礼として何かあげたいのだが何か望みはあるかね？」

望みつつあって……機体と車両の整備兵でももらえりゃいいんだが……あ、この世界には固定化の魔法があるじゃないか。

後燃料と弾薬か……。

「3つほどお願いしたい事があるのですがよろしいですか？」

「出来る事なら構わないぞ？」

「1つ目が俺の保有する機体と車両に固定化の魔法をかけて欲しいです。2つ目が燃料というあの鉄の鳥や中にある車両を動かすための液体の錬金と弾薬の錬金。これが無いと俺たちのアドバンテージが崩れます。3つ目があの機体がすっぽり入る倉庫、滑走路……まっすぐな3000メートル程の平らな道と俺たちの家の建設なんです……。」

「分かった。コルベール君、燃料とやらの研究と弾薬の生産は任せただぞ。固定化はわしが明日までに掛ける。倉庫と滑走路と家は……先生方とミス・ロングビルに任せておく。これでいいかね？」

「はい。ありがとうございます。」

案外簡単に整備の心配が無くなった。

後は燃料の生産が間に合うかどうかだな……。

才人かというと、オスマン学院長に俺たちの食事と身の安全の保証を約束させていた。……食料の事は忘れてた……。

「ところで、二人とも。君たちの事を教えてくれないか?」

「はい。率直に言くと、俺たちはこの世界の住人ではありません。」

「なんと……。」

「俺達の世界では月は一つしかないし、魔法も存在しない。だから、その代わりに、昼間俺たちが使ったような乗り物や道具を“科学”という誰でも使える技術を使って生産し、生活している。」

俺たちは日本を中心に人口、言語、文化、人種の違い、貴族制度の無い事などを細かく説明した。

教師達は日本の政治については特に驚いていた。オスマンはそのような高度な文明の世界があるとは……とつぶやいた後、俺たちに言ってきた。

「ヒュウガ君、才人君、君たちを呼び出してしまったことは申し訳なく思っている。この世界では君たちの世界の文明には到底及ばないかもしれないし、そのせいで君たちの生活に支障が起きるかもしれない。だがミス・ルイズのためにも此処に残ってあげて欲しい。もっとも君たちの世界に戻る手段は無いのだが。」

俺はその頼みに簡潔にこたえてやった。

「俺は元の世界に戻れなくても大して迷惑じゃないですよ。それは才人も同じですよ。」

俺の隣で才人が大きくうなずいた。

「それに、俺たちの世界の科学の集大成を、この世界に持ってきてしまいましたから、困ることも無いですよ。」

「そうか。ありがたい。後もうひとつだけ言うことがある。」

俺たちがガンダールヴとかいう話か? やっぱり原作より進行が早いな……。

「サイト君のルーンはガンダールヴ、ヒュウガ君のルーンはヴァン

ドゥールヴと言って、始祖ブリミルの使役した使い魔の内二人に該当するのじゃ。」

「・・・あれ？何か知らない単語が聞こえたような・・・。」

「もう一度お願いします。」

「君たちはガンダールヴとヴァンドゥールヴなんじゃよ。そしておそらくミス・ルイズは虚無という失われた系統魔法の使い手・・・。戦争に巻き込まれる危険がある。先ほどの竜騎士もウィスコン武装集団という非ブリミル信仰者の集団で、虚無が招く戦争を回避しようと、使い手と思われる人物を探している。すでに我々は虚無の全員を把握して、その警護に何人が秘密兵を送っているのだが・・・。」

「
おいおい・・・ここはまるで原作に乗っていない・・・。もうこれは別のパラレルワールドだと考えるしかないな・・・。」

そのあと、ガンダールヴとヴァンドゥールヴの説明を聞いたが、完全に分かっているのはガンダールヴだけで、ヴァンドゥールヴについては神の軍の管理神ということだけで、その効果は解明されていないという。

そしてその日はコルベール先生に軽油とジェット燃料のサンプルを渡して解散した。

その日の夜、俺たちは家が出るまでの間、職員寮の空き部屋を提供してもらい、そこで寝ることになった。家の完成は3日後あたりらしい。・・・魔法ってすごいなあ。

そうして、秋本日向の無駄に濃いハルケギニア初日が終わった。

翌日

「ZZZ・・・。」

「ZZZ・・・。」

「ZZZ・・・!?!?」

「zzzz...」

きっかり0500時。・・・といつても腕時計（G SHOCK 旧陸上自衛隊ver）を見ただけなので、実際この世界の時間かどうかはわからないが・・・。
とにかく起きた。

と同時に使い魔の仕事であつたはず（実際に説明は受けていない）の主人の世話をどうしようかと考えたが、面倒なのでやめた。

着替え（陸上国防軍2号両季用迷彩服）を終えると隣のベッドで寝ている才人を放っておいて、部屋を出る。目的地は・・・C-5G シングルだ。

乗務員用ハッチの内部で生体認証を受けると、コックピットに向かう。

操縦席の真後ろにある大型のロッカーのパスワードと指紋の認証を受け、ロックが外れる。そのプレートには“非常時陸軍普通科装備”とある。これは機体が不時着した際のいわゆる非常持ち出し品である。

要目は2号迷彩服が1着、マガジンベストが1着、簡易糧食3日分、水2？、24式自動小銃1丁とその弾倉10本（45発入）、9？拳銃1丁とその弾倉15本（10発入）、手榴弾が5個、小型無線機一式、信号弾が赤一色10発、そしてこれからもつとも使うであろう代物、18式1,440？軍用日本刀である。なぜかは分からないが、防衛省の奴らが開発（？）し、ほぼ全隊員に支給された軍刀である。

俺はそれだけを手に取り、機体を降りた。

適当な広さの場所を見つけ、軽くストレッチをしてから素振りをする。・・・ルーン無しでも取り回しは自由だ。

次にルーンを発動させ、軽く振る・・・ツシュパ！！・・・ズシン・・・つもりだったのだが、振った数秒後に何やら凄い音がして、数メートル先の木が真っ二つに切られた。

・・・・・・・・・・え？

もう一度振る・・・ツシュパ！！・・・ズシーン・・・また切れた。

どうやらこのルーンを俺が使用すると、切っ先が音速を超え、衝撃波が前方だけに真つすぐ発生するようである。うへえ・・・。

これは人のいるところで使用しない方がいいな・・・。少なくとも味方の・・・。

そう思っていると後ろに気配を感じる。振り向くと黒髪の偉い美少女がたっていた。

「す・・・凄いですね・・・剣が触れてないのにあんな遠くの木を倒せるなんて・・・。」

シエスタだったか？

「え・・・あ、ああ。俺は秋本日向だ。あ、日向の方が名前だ。日向って呼んでくれ。」

「あ、はいヒュウガさん。私はこの学院のメイドをしてるシエスタと言います。もしかして、ミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう・・・。」

「ああそうだ、部屋にもう一人いるけどな。」

「人間なのに使い魔だなんて大変ですね・・・。」

「いや、案外楽しいものかも知れないさ。」

「凄いポジティブな考え方ですね・・・。」

そうじゃないとやってらんねえぜ！！原作知識ありの特別編入かと思いきや、原作とか離れた戦場だったなんて。

「じゃ、そゆことで。じゃねー！！」

「え、ちよ、ちよつと待って下さいよ！！」

後ろでなんか叫んでいたが、とりあえず無視。長く話し過ぎて、フラグ立つちゃまずいからな・・・。君はサイトとくつついてもらわないと。

機内に戻り、ロッカーの中に刀をしまおうとしたが、やっぱりやめて腰につるし、拳銃をホルスターに入れる。マガジンポーチの中に弾倉を5本詰め、アーミーナイフを足のポケットに装着する。ついでにスタングレネードを2つ持っておく。

これが秋本日向の基本装備として定着したのだった。

話、その後装備（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

固定化、その後装備（前書き）

そろそろ外伝として才人や日向の地球での話を書こうと思っている
カトタクです。

なかなか話が進みませんが、今回の話もどうぞ。

固定化、その後装備

Side 才人

zzz・・・。

zzz・・・。

「・・・ト。」

zzz・・・。

「・・・イト！」

zzz・・・。

「才人お!!!」

zz・・・!!!!!

・・・ツハ!!!

此処は・・・知らない部屋だ・・・。

「おい才人。お前それでも小隊長か？」

知らない人・・・ツじゃなくて日向か!!!そうだ昨日ここに飛ばされたんだっけ・・・。

「な、何ですか？」

此処にはもう俺の学校は無いし、起こされる理由が見当たらない。

「トレーニングだ。」

それだけ言うと俺に2号迷彩服を渡して外に行ってしまった。

トレーニング?・・・そういえば日向はもう着替えてたし刀・・・18式軍刀か?と拳銃を装備していた。もしかやもう朝のトレーニングを終わらせていたのか?とにかく急ごう。

俺はなれない迷彩服を着ると腕時計(G SHOCK 無島高等学校ver)を装着し、日向からもらった24式自動小銃をつかんで部屋を飛び出した。

ヴェストリの広場

俺は先に行ってしまった日向を見つけると、日向に30分間の腕立て伏せ、20分間の上半起こしを命じられた。まあ、それぐらいなら俺のところで毎朝やってたからな……。

日向も一緒になってやっていたが、計50分間のウォームアップを終えて、ルイズの部屋に行くことにした。

使い魔やらなんだか知らないが、一応起こしに行っておくに越したことは無いだろうということだ。まだ6030時。まだ熟睡してそうだけだな……。

……やはりというかなんとというか……案の定まだ寝ていた。

……だが起こしたとたんいきなり殴るこたあねえだろう!!

「あんた達誰よ!!」

「……勝手に呼び出しておいてそれはあんまりじゃないか？」

「その通りだ……。」

どうやらまだ寝ボケてて、どこその旧式コンピュータの様に俺たちの事を思い出している途中らしい。

「……んー……あ、使い魔ね……昨日呼び出したんだっけ……

・あれ?そのあとどうなったんだっけ？」

「俺たちの飛行機に乗って気絶したから、この部屋に運んでおいたんだよ。」

俺の代わりに日向が答えてくれた。

「あらそう……ツじゃなくてなんで気絶するような動かし方をするのよっ!!」

「それはお前がなれてなかったからだ。それに戦闘が考えられる場合は特別な服を着なきゃいけないんだよ。」

「こ、この使い魔は……!!」

「ったく、さっさと服替えてシャツとしゃがれ!」

そう言っただけ俺たちは部屋を出る。後ろで着替え手伝いなさい!!という声が聞こえたが、とりあえず俺たちは無視することにした。

十数分後……

「アンタ達は朝ごはんも昼ごはんは抜きよ!!ご主人様に向かつて
どんだけ横柄な態度取ってんのよ!!」

「・・・まだ主人と決めたわけじゃないし考えてもいない。」

横で日向が目を細めていたが言いたい事は言わせてもらおう。

「まったく・・・ブツブツ・・・」

「あら、おはようルイズ。・・・あなたの使い魔ってソレ？」

ルイズが部屋の前でブツブツ言っていると隣の部屋のドアが開いて
赤い髪の・・・胸がやたら強調された服を着た女の人が出てきた。

そう、女の人だ。大事なことから二度言わせてもらおう。ルイズな
んかまだまだ発育途中だ。

「・・・なんかルイズにギロリツつっつ擬音を伴った視線で睨まれた。

「そうよ。私の使い魔はこれよ、コレ。何か悪い？」

「あはっ！平民が使い魔だなんて・・・さすがゼロのルイズねえ。

」

「つくう!!行くわよ!!二人とも。」

何なんだゼロって？聞こうとしたら日向に目で止められた。・・・

そうか。こいつは本を知っているからゼロの意味を知っているのか。

・・・（才人はゼロ魔の大体の流れを教えられただけで、自分が
主人公だとは知りません）

「待ちなさいよルイズ。まだ私の使い魔の紹介をしてないわ。フレ
イム。」

「きゆるきゆる・・・？」

あ、なんか可愛い声出しながら赤いものが出てきた・・・。

「これが私の使い魔。サラマンダーのフレームよ。」

「へ、へえー。珍しいじゃない・・・。アンタ火属性だものね。」

「そんなに強がらなくてもいいのよ？」

この人はルイズの天敵だったのか。

「うるさい!!ほんとに行くわよ!!」

このあたりの事も日向は全部知ってるのだろうかと思いつながら、俺
たちはルイズに引つ張られていった。

ルイズに飯を抜かれた俺たちは昨日張ったテントの中で戦闘糧食（鶏肉の照り焼き丼、缶入り500g）を咀嚼しながら、雑談をしていた。

「やっぱ日本のレーションってうまいんだな。」

「ああ、下手なコンビニ弁当より断然うまい。」

「日持ちもするしな。後何食分ある？」

「・・・ざつと3000食分」

「どんだけ積んでんだよ・・・。」

「いや、演習の昼飯になる予定だったらしいからこれでもまだ少ないほつだろ・・・俺が気になるのは武器の多さなんだがな。」

「なんでだ？」

「ああ、普通富士総合火力演習つつつてもあの輸送機の爆弾はあまり必要ないんじゃないかと思ってさ。車両にしても、いまさら一両増えたところで演習には何の影響も無いはずだ。」

「・・・でもまあいいんじゃない？そのおかげで、昨日も助けられたんだし。」

「そうだよな・・・考えすぎだよな。」

「そうじゃよ。そのおかげで君たちを信用することになったんじゃないの。」

「うんうん・・・ってオスマン学院長！！」

「ど、どうしたんですか？」

いきなり現れたオスマンに驚きつつも用件を聞く。

「いやいや、君たちに頼まれた固定化の魔法をかけておこうかと思つての。」

「あ、ありがとうございます。じゃ、じゃあ此方へ来て下さい。」
オスマン学院長を校門の外側にある機体に案内する。

「これはまた大きな竜じゃのう。しかも全て鉄より硬い物質で出来ている。」

「はい。この飛行機は炭素というダイヤモンドの原子・・・形成する小さな粒を組み合わせで作られたカーボン素材という我々の世界では先端技術として扱われているものを使用しています。此方の世界ではまだまだ製造は無理でしょうが、人々が作るうと思えば200年そこで作れるようになりますよ。まあ、この飛行機自体はまだ500年はかかると思いますが。」

「そうか。6000年も同じような生活を続けてきた我々とは伸び方が違うのじゃな。分かった。固定化を卦けるとするかの。」
オスマンが背の丈より少し小さいぐらいの杖を振ると、機体が淡くひかり、固定化がかかったことが証明された。

「これで、終わりのか?」

「・・・いえ。これから本番です。」

俺たちは機体の中にオスマンを案内すると、3両の車両と山と積み重ねた弾薬と銃火器を見せた。オスマンは苦笑いをしながら、これは時間がかかりそうじゃな。とつぶやいた。

俺は半日はかかるのではないかと思っていたが、さすがはオスマン。ルイズが朝食を終える前に全て掛け終わってしまった。

さすがではあるがオスマンも少し疲れているようだった。

「全て掛け終わった様じゃの。・・・少し休みたいわい。」

「忙しいところありがとうございました。ゆっくり休むようにしてください。」

「そうじゃの。ああ、そういうえば固定化を卦けている途中宝物庫で見たことのある様なものがいくつあった。秘書のミス・ロングビルをつけるから後で見えておいてもらいたい。使えそうなものはわたしに言ってくれ。譲渡出来るものなら君たちにあげよう。」

「分かりました。何から何までありがとうございます。」

「ではわしは行くとするよ。ミス・ロングビルには君たちの部屋へ行くように後で言っておく。」

「はい。」

ミス・ロングビルは確かフーケだったはず。そんな人を宝物庫に入れて大丈夫だろうかと思っただがそれはあとで考えておこうと思っただ。あ、才人。その小銃なんだけどそんなのいつも持ってらんないだろ？ホルスターとベストやるから拳銃装備にしとけ。たぶん後3日かそこらで剣がてに入るから。」

「ん？あ、そうだな。」

そう言っただ才人は小銃を機内に戻すと装備を身につけ始めた。

そして、日向と同じ装備から刀を抜いてのちにデルフリンガーを装備した物が才人の標準装備になった。

固定化、その後装備（後書き）

どうでしたか？

作者、まだ先ですがタルブ村で登場する竜の羽衣をどうするか悩んでいます。

原作通りゼロ戦にするか、もしくは戦闘ヘリ、戦闘機etc・・・アイデアがある人はジャンジャン感想で提案してください！！

でわまた次回！！

更新再開！！（前書き）

お久しぶりです！！

かなり遅かったです、あけましておめでとございます。

今日、ようやく進級にかかわるテスト、もとい模試を終わらせ、やっとゆっくりできるようになりました。

今回はいつもより少し長めですが、どうぞお付き合いください。

更新再開！！

才人の装備を改めた後、一応ルイズを迎えに行くと、授業についてくるように言われた。襲撃の次の日に授業があるのかと聞いたが、それは学院に主だった被害が無かったかららしい。ちなみに竜騎士の方はまだ失神しているらしい。まああのミサイルの実験で象が3日間失神したままだったからな。人間じゃ1週間は起きないかもしれん。

ルイズの向かった教室は原作の通り大学の様な作りだった。

「へえ〜。さすが貴族の学校だけあってしっかりした作りだな。耐震強度は分らないが。」

「よくわかってるじゃない、ヒュウガ。・・・ところで耐震強度って何よ。」

「たぶん此処じゃ何にも関係ない事だ。」

「あっそう。」

無駄な話をしながら3人で教室の一角に行き、ルイズが座った後才人も座ろうとしたので、俺も座った。

「ちよつと！！そこは貴族だけが座れる席よ。アンタ達は床に座りなさい。」

原作でもそう思ったが、ムツとしたので、

「俺たちは学院長直々からこの学院の施設の自由な使用を許可してもらっている。この椅子に座るのも自由だ。」

つと言ってやった。悔しそうな顔をしてたのはいうまでもあるまい。俺は授業が終わるまで寝ていようと思ったのだが、この後ルイズが石を破片手榴弾のごとく爆破することを思い出して、やっぱりやめておくことにした。

そして

「ではミス・ヴァリエールにはこの教室の片づけを罰として与えま

す。ヒユウガ君とサイト君には彼女を手伝ってもらいたいのだが。」

「分かりました。」

「ありがとうございます。では片づけが終わり次第次の授業を開始します。」

「アンタ達もゼロって笑えばいいじゃない。」

「・・・時期が来れば使えるようになる。」

「どういうことだ？日向。」

「そのままの意味だ。条件が揃えばすぐにコモンマジックは使えるようになる。」

「それはいつなのよ！！いつまで待てばいいのよ！！適当なことは言わないで！！」

ルイズは魔法が使えないから、貴族という立場に大きく頼っている部分がある。

魔法さえ出来れば感情の起伏が激しい、ただの女の子だ。

「適当なんかじゃない。お前は俺達を召喚する魔法は成功したじゃないか。しかも・・・自分で言うのもなんだがこの世界の常識を覆す火力を持った俺たちをだ。時間軸で言えば後1月かそのくらいだ。それにあまり魔法に頼り過ぎるのも良くないぞ。」

「アンタ達は・・・一体何なの？」

「俺たちはただの日本国陸上国防軍富士340輸送隊隊長、及び元第1普通科連隊隊長の秋本日向一等陸佐と。」

「同じく日本国東京都無島高等学校第3地区学生自衛部隊第1小隊長長、平賀才人三等学尉だ。」

「俺たちは二人とも軍人だ。何かあってもお前くらい軽く守れるから。そんなことでピリピリするな。」

「・・・とう。」

「ん？なんか言ったか？」

「うっん、何でもない。全く、昨日といい今日といい、なんか変な使い魔ね。」

「余計な御世話だ！！！！」

「……ハハハハハッ」

！！

片づけをしなければ！！

その後3時間で教室の応急修理と掃除が終わり、結局授業はつぶれてしまった。

「ハ、ハラ減った……」

俺たちは二人ともガス欠を起こしかけていた。

「さ、才人。」

「な、何だ？」

「テ、テントに戻るか……」

「そうだな……。なんか食わないと死ぬ……」

そう言っただけでテントに戻ろうとしたが、ルイズに引きとめられた。

「アンタ達、やっぱり昼食抜きはやめておいてあげる。一緒に来な

さい。」

「……？」

俺たちはあまりにも急なルイズの気変わりに驚きながらも、ついていくことにした。

場所変わってアルヴィーズの食堂。

原作とかアニメでは見たけどかなり広い。

寮に分かれているわけじゃないようだが、ハリタの大広間によく似ている。

「ここに座っていいわよ。」

そう言っただけでルイズがそばの2席を示し、自分はその隣に座る。

俺たちがその席に座ると早速食事を始める。

俺たちもせっかく許可が出たので食べ始めたが……はつきり言って味が濃くてあまりおいしくない。肉も火が通りすぎて硬く、パサパサしている。

見ると才人も同じ感想を抱いたようだ。

だが教室を修理した後の空きっ腹には代えられず、あつという間にテーブルに並べられていた食事はその量を減らせていった。

「ルイズ、この後授業はどうなってるんだ？」

宝物庫の中身を見に行かなくてはならないので、一応予定を聞いておく。

「えっと、午後は後3時限の授業で、あとはお茶の時間ね。」

「そうか。俺と才人はオスマンに宝物庫の中身を確かめるように頼まれてるから授業に出られないがいいか？」

「ええ！？ まだあたしでさえ入ったことないのに何であんたたちが入れるのよ！！」

「なんでも何も言った通りだよ。中身を確かめてくれってさ。」

「はあく。いいわよ。好きにしなさい。」

授業に出れないことより、宝物庫に入れるほうが驚いたみたいだが、許可はもらえたのでよしとしよう。

「才人、行くぞ。ルイズ、飯ありがとな。」

「おう。ルイズ、御馳走さん。」

「一度私の部屋に戻りなさいよ。」

「わかった。」

ルイズと別れた俺たちはロングビルさんが車で自分たちの部屋に戻って休憩することにした。

「才人、お前携帯の他に何持ってきた？」

「えっとデジタルカメラとパソコンとツールと懐中電灯だな。あ、あと予備のバッテリーと充電機があるよ。」

ちなみにデジタルカメラはLUMIXでパソコンはVIO、携帯はiphone 5GSだった。

「そうか。充電はC-5で出来るから自由にやってくれ。それと後でその携帯貸してくれ。ちゃんと返すから。」

「ん？ いいぞ。」

「ちなみにこのPCの中にはどんなお宝が眠っているのかな？」

「うわっ！！ やめろ！ 俺の隠しフォルダを勝手に開くな！！
日向！！」

そんなこんなでしばらく経つとロングビルさんことフーケ・・・いや、この場合はフーケことロングビルさんが部屋にやってきた。

・・・コルベル先生もつれて。

「せ、先生。授業はどうしたんですか？」

「いや、そりゃもちろん・・・ほっぽり出してきたよ。」

「・・・だめじゃないですか！！」「」

「いや、しかしだな、これまで使い方がわからなかった道具の使い方がわかると思うと、その・・・血が騒ぐというか・・・。」

「・・・まあ生徒もそれなりにうれしいでしょうし大丈夫でしょう。」

「ロングビルさん。それはどういう意味でしょう？」

「・・・結局コルベル先生を加えた4人で宝物庫に向かうことになった。」

「そういえば、昨日の竜騎士たちはどうなったんですか？」

道中コルベル先生に質問する。

才人はなんかロングビルさんの気を引こうとしてるのかずいぶんとテンション高く話していた。

「この学院の地下にある牢屋に入れてあるよ。サンシキダンだったかな？あのおかげでまだ眠っているよ。」

「そうですか。目がさめたらまた教えてください。」

「わかったよ。」

宝物庫につくとロングビルさんが大きな鍵を取り出して解錠する。

さらにオスマンから預かったと思われる道具で呪術を取り除いてや
つと入ることができるようだ。

「おい・・・これは・・・。」

「・・・そう・・・だよな。」

中にあるのは地球からの流入品と思われるものがほとんどだった。中には兵器の類もあった。

古いものでは火縄銃、新しいものでは24式自動小銃・・・。

「AK47だ・・・。」

ベストセラーも取りそろえているようだ。

とにかく俺たちが使える主だったものを見ていくところなる。

- ・ AK47
- ・ AK74
- ・ AK104
- ・ M14
- ・ M16A1・A2・A4
- ・ M4A1・A2
- ・ 64式自動小銃
- ・ 89式自動小銃
- ・ M134ガトリング砲
- ・ ブローニングM2重機関銃
- ・ 91式携帯地对空誘導弾
- ・ M74 LAW
- ・ RPG7
- ・ M26破片手榴弾
- ・ M I N I M I 軽機関銃
- ・ ナイツSR-25狙撃銃
- ・ イサカM37ショットガン
- ・ H&K USP
- ・ M P 5

∴ . . e t c e t c

つてか上げきれない！！

だがそのほとんどが日本製と米国製である。

ダイジョブか！？ ニッポン！！

「どうですか？」

「なんと行っておこうか……。」

「えっと、なんというか、素人の手元に置いておくのはかなり危険なものです。」

才人は素人ではないので除外だ。

「まずはオスマン学院長をよんで結果を報告しないと……。」
「なんじゃい？」……っわー！！いきなり現れないでください！！」

また俺が話してる途中でオスマンが現れた。

「すまないの。で、どうだったんじゃ？」

「あ、はい。ここから…….
ここまでが我々の世界のもので、このうちここから…….
…….
ここまでが軍で使われている兵器です。」

「やはり破壊の杖も君たちの世界の兵器じゃったか……。」

「なんです？ 破壊の杖 って？」

事情を知らない才人がオスマンに尋ねる。

「これじゃよ。」

そう言つてオスマンが持ち上げたのはM72 LAWだ。直接照準で発射する使い捨てのロケットランチャーだ。

「わしがまだ若いころこれをもう一つ持った異国風のものがこれ
わしを助けてくれたんじゃ。そのものは助かるとはとても思えない
傷を負っていたのじゃが、なんとかハルケギニアで一番強い薬とい
い医者を見つけることが出来ての、なんとか助けることができたの
じゃ。」

……へえ。ここも原作と違うのか……。

「それで、その人は今どこに？」

「傷が癒えた途端に旅に出してしまったので、今はどこにいるのか……。」

「わかりました。ちなみに名前は何と書いていましたか？」
心の奥底でかすかな期待が膨らむ。

もしかしたら日本人なのではないだろうか。日中戦争のときは米國と武器の共有をしていたから、M72を使っていたとしてもおかしくはない。

しかしオスマンからは思わぬ名前が出てきた。

「ヒラガセイジと言っていたが。サイト君の親戚かね？」

平賀セイジ？

隣で才人の体が固まる。

「……俺の兄です。」

兄さんいたんだね。才人君。

いつか会えるといいな。

「ではその武器の管理は君たちに一任する。すべて固定化がかかっておるからの。」

そういうとオスマンは静かにそこを去って行った。

「才人、どういうことだ……？」

才人の硬直がやっと解ける。

「俺の兄さん、日中戦争で行方不明になっちまってな。それからあんま軍事関係に近寄らなくなったんだけど今回の演習観戦に行つたのは正解だったかもな……。」

「よかつたじゃねえか。」

「ああ。絶対にいっしょに帰ってやる。」

あ……。才人が帰りたい派になっちまった。まあいいけどさ。

そんなこんなで上機嫌な才人とともに200点を超える銃器を俺たちの武器庫……つもりC-5に運び入れると、テントを片して1週間分の戦闘糧食、武器弾薬をもつと、部屋に戻って暇つぶしをすることにした。

ツとその前に……。

「才人、携帯返しとくぞ。ネットワークをC-5のデータベースにつなげといたから通信もこれで出来るからな。インターネットは出来ないけど……。」

「お、お。ありがとうございます。」
さて・・・やることはない・・・。

更新再開！！（後書き）

原作から徐々に軌道がそれています。
はたして完結までできるかわかりませんが・・・。
これからもよろしく願います。
ではまた。

ご意見、ご感想お待ちしております。
竜の羽衣のリクエストもよろしく願います。

いよいよ原作にのり始めました！！（前書き）

久しぶりです。

テスト終わったのになかなか更新できませんでした。
すみません。

ではどうぞ。

いよいよ原作にのり始めました！！

やる事が無くなったのでブーツとしていた俺たちだが、ルイズに部屋によるよう言われていたのを思い出したので二人で行くことにした。

教師寮から学生寮に行くには一旦外に出なければならぬ。だからその途中で学院のメイジが4、5人で俺たちの家と滑走路を造っているのが見えるのだが、その速い事速い事……。

家はすでに完成していて、今は滑走路のアスファルトの再現を頑張っているところだった。だがいくらなんでも速すぎだろ。

耐震強度とかは考えなくてもいいかもしれないが……。

まあ早く完成するに越したことはないからな。期待して待つとしよう。

何か手伝えればいいが何も出来ないな、あれじゃ。

その時はメイジが土に呪文を掛けてアスファルトに錬金を終えたところだった。

なんでそんな物を知っているのだろうか？

「ルイズ〜。入るぞ〜。」

ルイズの部屋の前に着いた俺たちはとりあえずノックして部屋に入る。

「……そして誰もいなくなった。」
「とりあえずボケておく。」

「いや、ただルイズがまだ帰ってきて無いだけだろ。」

「どうする？」

「暇だし様子見に行くか。」

あれ？ そっぴいやルイズはお茶会中のはず。

確か才人はお茶会のときにギーシュにからまれたはず……。そう

思つて才人を見ると。持っている武器と言えば9mm拳銃にスタングレネードとアーミーナイフだけだ。

このアーミーナイフはコツさえ覚えれば鋼鉄製の鎖でも切断できるカーボンチタン製の超硬質、超軟質のナイフだ。ギーシュとまともによりあつてギーシュが死なないような武器は今全く持つていない。スタングレネードは周りに人がいるのに使つてはまずいだらう。

・・・が、この時点でのギーシュは平民を見下して、才人を完全に殺ろうとしている野郎だ。少しぐらい危険な武器でも構わないかもしれない。

「そーだな。そうと決まったらシエスタのところに行って給仕の手伝いでも申し出るか。」

「なんでだよ!!! つかシエスタって誰だよ!!!」

そうだった。シエスタは才人に飯を分けてやったから才人と顔見知りになつたんだ。こつちじゃ俺の戦闘糧食があつたからな・・・。ん？洗濯しに行く時だったような気も・・・。やばい。結構前に読んだ小説だから、内容があいまいになつてきている・・・。

「あー・・・そういう設定になっている。・・・たぶん。」

「たぶんつてなんだー!!!」

「ごちゃごちゃ言つな。行くぞ。」

また記憶に齟齬が発生しないうちに才人を連れていく。

場所変わつて中庭・・・？

様々な動物（使い魔）がその主であるう人物と戯れていた。

その中でルイズは一人寂しく椅子に腰かけてお茶を飲んでた。

「よおルイズ。」

「あら・・・。もう用事は終わったの？」

「ああ。とつくにおわつた。」

「終わつたらさつさと戻つてきなさい!!!」

「・・・なんでだ？」

「今は使い魔との親睦を深める時間なの。アンタ達がないから笑

われるのよ……。」

周りを見てみるとこつちを向いてクスクスと笑っていた奴らが一斉にそっぽを向いた。いけすかない奴らだ。

「いや、俺らがいたら余計ダメなんじゃないか？ 人間が使い魔って珍しいんだろ？」

「そうだけど……いやそうじゃないんだけど……。」

「ま、いいけどさ。俺たちも何か飲みたいんだが。」

はつきり言つて銃器を運んだためにかなりのどが渴いている。後で水道の場所を聞いておかねば。いや、此処は井戸が飲み水の給水所なのか？

「使い魔の自覚が無いみたいだけど、まあいいわ。メイドに頼んであげる。」

ルイズがそばに待機しているメイドさんに分かるよう合図する。

才人は現代高校生の癖なのか携帯をいじっている。内臓メモリ80GBのその端末（詳しくは武器庫参照）にはiTunesからダウンロードした各種アプリと画像、動画データが山のように入っているらしい。

そこへ紅茶のカップを3つ装備したメイドさん、もといシエスタがやってきた。

「お待ちせしました。」

「うおわ！！ リアルメイド！！！」

才人よ、ここじゃメイドは珍しくも何ともないんだぞ！

「ヴォルジエ村で作られた紅茶です。」

「ありがとうございます。」

ルイズはさも当然というように紅茶飲んでいる。まあ、当たり前なんだろうが。

才人、そのiphoneのカメラをメイドさんに向けるな。

「だってカメラなんかみんな知らないだろ？」

「そついう意味じゃない。」

全く。カメラ向けるなら許可を取れってんだ。

「ヒユウガさん。この方は？」

「ああ。俺と一緒に飛ばされてきた平賀才人。これでも軍人だったさ。」

「よろしく・・・えつと・・・。」

「シエスタです。」

「ああ。よろしく、シエスタ。ところでなんで日向はシエスタの事知ってたんだ？」

「うらやましいか？ そう言いかけて言葉を飲み込む。ルイズの顔が不気味だ。」

「ひがむなよ。お前が寝坊するのがいけないんだぜ。」

「俺も明日から5時起きにしようと思う!!」

そう“ルイズを差し置いて”談笑していると後ろから声がかかった。

「おい!! そのメイド、話してないで僕の紅茶を持ってこい。」

「は、はい。ただいま。」

シエスタはあわてて紅茶を取りに戻った。

「大変そうだな。」

「そうだな。」

声をかけた男は言わずもがなギーシュだ。見ていると友人とつるんで誰と付き合っているかを話していた。

するとギーシュのポケットから香水の入っているだろう小瓶を落ちた。ギーシュは気付いていない。そこへ紅茶を装備したシエスタが来た。足元に落ちていた小瓶を拾い、ギーシュに私物かどうか尋ねている。そして周りの友人が騒ぎ出した。ハハツ、弁解してるみただけで後ろにドリル髪と1年の鬼っぱいのがいるぞ。

結果から言うとギーシュはすでに叩き潰されていた。

これでいいのか悪いのか・・・。

だがシエスタを責める力は残っていたらしい。

「おいメイド。君のせいで僕が恥をかいてしまったじゃないか。どうしてくれる。」

「す、すみません貴族様のものだと思つたのでついうつかり・・・。」
シエスタは縮こまってギーシュに頭を下げている。

「なあ日向。あれって、シエスタ何も悪くないよな？」

「ああ。そうだ。」

「ちよつと止めてくる。」

「おう。頑張つてこい。でも殺したり大怪我を負わすのは良くないぞ。実力が強いってことだけ見せてやればいい。」

「了解。」

そう言つて見送る。そういえば始めて主役らしい事したな。才人。

Side 才人

「だからきみが」

「ちよつとお前言い過ぎじゃねえか？」

「なんだ君は？ 関係ないものは引つ込んでいてくれたまえ。」

「シエスタとは知り合いでな。お前の自業自得をこの子のせいになされて黙つていられなくなつたんだよ。」

シエスタはこつちを見て首をフルフルと振っている。なんでだろ？

「ん？ ああ。君はルイズの使い魔か。ゼロのルイズらしい馬鹿な使い魔だな。」

「俺としては自分が馬鹿にされるのは構わないがルイズを馬鹿にするのはいささか気に入らねえな。」（これは才人です）

「貴族の僕に知つた口を利いているんじゃない。君も平民だろ？」

ま、魔法が使えない点じゃルイズも変わらないが。」

そう言われて俺は一瞬でナイフを抜くと目の前の男に向けた。周りがザワツと騒ぎ出す。俺はこんなに好戦的だったとは思わないのだが、抜いちまつたもんはしょうがない。どうせなら拳銃抜けばよかった。

「ふん！！ 貴族にナイフを向けるとは思つたよりさらに馬鹿だったようだな。分かつた。君と決闘してあげよう。君が勝つたら僕が

誠心誠意でメイドに謝る。だが……僕が勝つたら君は一生僕の奴隷だ。いいな？」

「ああ。いいさ。」

周りがまた騒ぎ出す。

「いいぞ、ギーシュ！！ やっちまえ！！」

「ギーシュ！！ 卑怯だぞ！！」

「そつだそつだ！！」

シエスタなんかは呆然として眼がうつろである。そんなに怖かったのだろうか。

「じゃあ決闘はヴェストリの広場で行う。逃げるなよ。」

「もちろんだ。そつちこそ逃げるんじゃないぞ。」

これでいいよな？

「あ、あなた、死んじゃう……。」

シエスタが横でそうつぶやくと建物の中に走って行ってしまった。

「ち、ちよツ、シエスタ！？」

ひでえな。せつかく助けてやったのに。

「ちよつと！！ アンタなんて約束してんのよ！！」

「ん？ 決闘だけど？」

「貴族に決闘なんてばかみたい。今すぐ行って謝ってきちゃいなさい。ギーシュなら許してくれるわ。」

「お前まで馬鹿なんて言うなよ。それにお前の事馬鹿にしてたんだぞ！？」

「いいのよ。私は。ほら言ってきたきちゃいなさい！！」

「いやだ。」

「ルイズ。才人を信じてあげてもいいんじゃないか？ こいつ（た

ぶん）結構強いぞ？」

「たぶんとかいうなー！！」

「私は知らないわよ！？」

「いいよ。自己満足だし。」

「ふんっ！！」

ルイズは怒って行ってしまった。まあ、決闘が始まったらやっぱり不安でこっち来るんだろうけど。

「行くのか？」

「当たり前だろ。」

「頑張れよ。ほらよ。」

そう言われて18式軍用日本刀を渡される。

「え？」

「貸すだけだぞ。傷つけたら許さんからな。」

ツンデレか？

「ありがとよ。」

さて、ヴェストリの広場か。言ってみるか。

いよいよ原作にのり始めました！！（後書き）

次回は決闘ですね。

期待は・・・しないほうがいいかも・・・。

ここで報告ですが、作中でも出てくる日中戦争を題材にした小説を“小説を読もう”で書き始めました。完全オリジナルですが、このしょうせつとのリンクがいくつかあるので、読んでみてください。

（「平成日中戦争」日本のみらい〜）
・・・ツと言ってもまだ1話しか投稿してませんのでもうちょいま
ってください。

ではまた次回！！

ご意見、ご感想お待ちしております。

少しだけ人物紹介・・・（前書き）

ごめんなさい。

戦闘（？）シーンは予想以上に難しいです。本編はまだ先になると
思います。

少しだけ人物紹介・・・

秋本日向（あきもとひゅうが）

年齢 51歳

身長 176cm

体重 76kg

独身寮暮らしの男性。51歳だが周りからは20代に見られる。防衛大学卒業後、陸上自衛隊東部方面隊中央即応連隊に12年間所属し、その後司令部に4年間勤めた。司令部の第4部長を務めたのち、再び中央即応連隊に配置され、38歳から1年半の間連隊長を務めた。またその後、なぜか陸上自衛隊特別装備準備訓練機関のもと、航空自衛隊に配属され、年齢規定があるはずのだが輸送機の操縦法を4年間かけて行い、自衛隊が国防軍に改編されると同時に配備されたC-5Gシングル輸送機のパイロットとして43歳で陸上国防軍富士340輸送飛行隊長に就任した。なお、富士340輸送飛行隊のメンバーは他は航空国防軍に所属しており、早い話が実質日向一人である。

レンジャー、空挺、格闘徽章を保有。

英検2級、漢検準1級、数検準2級、大型2輪・普通・中型・大型・けん引自動車免許、危険物取扱者免状甲種、業務用ヘリ操縦免許保有

平賀才人（ひらがさいと）

年齢 18歳

身長 172cm

体重 65kg

都内某所の無島高等学校の2年生。

原作と顔や性格は同じようだが、能力は数段上。

高校内の学生自衛部隊第3地区第1普通科小隊の隊長であり、3等学尉である。但しこの階級はあくまで学生組織の中であり、軍内のものではない。

無島中等教育学校に入学後、すぐに学生自衛部隊に入隊。高校生に上がると同時に同部隊の第3地区第1小隊隊長に就任。部下19名を抱える。

出来るだけ多くの免許を取ろうと頑張っていた時期があり、それなりに凄い免許を取得している。免許は持っていないが先輩からの指導でセスナ機程度なら操縦できる。射撃が比較的うまく、狙撃も観測手がついてくれなくても一応可能。

学校では64式7.62mm小銃を愛用していた。

陸上国防軍との共同訓練に参加した際、レンジャー徽章を収得。

現在の主要兵装は24式5.56mm小銃、ミネベア9mm拳銃、11式音響閃光手榴弾、サバイバルナイフ、アーミーナイフ。

レンジャー徽章保有。

英検2級、漢検1級、2級小型船舶操縦免許、中型自動2輪・普通自動車免許、業務用ヘリ操縦免許保有。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

ほぼ原作通りのため、[Wikipedia](#)参照。(ごめんなさい)

少しだけ人物紹介・・・（後書き）

感想などでの質問などが、多数ありましたので、2人だけ書かせて頂きました。

決闘、んでタバサ登場！！（前書き）

やっと終わったぜ！　なんかギーシュ厨二病的な感じですよ。

ではどうぶ。

決闘、んでタバサ登場！！

ヴェストリの広場 Side 才人

「ふん！！ 逃げずにきた事はほめてやろう。だがここに来たからには容赦はしない。謝るなら今のうちだぞ？」

「ハ！！ そんなことするぐらいなら最初から首つっこまねえよ。」
「いちいち悪役みたいなセリフを言うんじゃないよ……。」
「お！ ルイズがいる！ やっぱ来るんじゃないか。」

いつの間にか俺たちの周りにはかなりの数の群衆が集まっていた。賭けもどこかでやっているようだ。

「僕は君がどうなるうと知ったこっちゃ無いが、僕の評価にもつながるのでね。あまり無闇な殺生はしたくない。それでも僕と決闘したいのかい？」

「せいぜい保健室送りになって単位が取れないなんてことにならないければいいな。」

「ッ！！ この平民ごときが僕に危害を加えられなくても思っているのか！？ ふざけるな！！」

そういうとギーシュは薔薇を模した杖を掲げると、地面の土が錬金されて青銅色の戦乙女が2体精製される。色と見た目の質感からして完璧な青銅製だな、ありゃ。

それなら18式軍用日本刀だけで十分かもしれない。俺は腰のホルスターに伸びていた手を外すと、日本刀に手を掛ける。……無反動砲でこいつ吹き飛ばしちゃダメかな？

そんなことを思いながら刀を抜いて正面に構える。銃を持った時など比べ物にならないほど意識が研ぎ澄まされ、刀の情報が頭に入りこんでくる。

「珍しい剣だな。平民にしちゃいいものを持っている。この勝負に貴様が負けたらその剣は僕が貰ってやろう。」

「ふざけるな！！ 俺が負けることなんかない。いや、負けたらだ

めなんだよ。それにこの？刀はこの世界じゃ絶対に作れない業物なんだよ。そこらへんの剣と一緒にされちゃ困る。」

そうなのである。この18式軍用日本刀は刀身がカーボンチタン合金製でさらに刀身自体には二敷効果の付与されたニクロチューブが焼き入れられている。この効果により、刀身の周りの空気に陽子を集中させ、刀身に直接物体が触れることなく、断ち切ることが出来るのである。但し水中では陽子が水分子にしか持たせられないため、少々無視できない反動が腕にかかる。

「そこまで言われちゃ手加減はする必要が無いな。僕は“青銅の”ギーシユ。君の相手、もとい君を叩き潰させてもらおう。行け！！ワルキューレ！！」

やっぱり青銅か。んじゃ、此方も行かせてもらいますか。

まずは正面の1体。何とかのルーンのおかげか動きがかなり遅く見える。

グシャアッ

俺につかみかかろうとした人形が頭と胴体を切り離して倒れる。それはそれきり動かない。人間と同じように頭をつぶせば平気なのだろうか。

急にやる気がなくなって腰のホルスターから9mm拳銃を引き抜き一発だけ撃つ。その一発は迷うことなくもう1体の人形のこめかみ部分を貫通する。

時間にしてわずか数十秒。1分と経っていない。

「そんなバカな！！ 僕のワルキューレがこんな短時間で……
でもこれならどうだ。銃は1発しか撃てないからな。」

そう言ってギーシユは人形を何体も錬金する。その数、8体。対して拳銃の弾倉内の残弾数は9発。薬室に弾が入った状態で満タンの弾倉を入れたからだ。

この世界の常識で考えないでほしいもんだね、全く。

俺は銃口を真つすぐに8体の人形に向ける。

そして

ダン！ ダン！ ダン！ ダン！ ダン！ ダン！
ン！ ダン！

1発も外すことなく人形の頭に穴をあける。

ギーシュ、啞然。

「き、君は一体……。その銃は何なんだ……。」

その問いを無視して弾が1発残った銃口をギーシュに向ける。

ダン！

ギーシュの顔の右横2mmの場所を9mm弾がかすめる。

「これでこの銃は弾切れだ。お前ももうあの人形は作れないだろ？

飛び道具はもうやめた。決闘なら拳でやろうや。」

そう言つてスライドが後退したままの銃をホルスターに戻し、ポタンでカバーして外れないようにする。刀も鞘に戻して壁に立てかける。何かあつた時の武器は足首に巻いた小型のナイフと腰に挿したサバイバルナイフだけだ。

ギーシュはまだ口をパクパクさせたままでこつちを見ている。意外と脆いのか？

「おい。聞いているのか？」

「な、なんで殺さない？」

「あん？」

俺は怪訝な顔（周りから見たらそうだろう）をしながら、ギーシュを見遣る。

「だから、僕は本気で君を殺すつもりでワルキューレを送ったんだ。だから、君も僕を殺せばいい。」

「へー。意外と覚悟は出来ていたらしいじゃん。だけどな、そんなんじゃ地球人、特に軍人は殺せねえよ。魔法なんか使えなくてもこの世界の人間なんかより何倍も進んだ文明持つてんだよ。俺が自慢する事じゃないかも知れねえがこんな世界より何倍も便利な世界に住んでたんだよ。俺たちは。高々貴族制に胡坐かいて実戦になれば何も出来ずにへたり込む奴ら何ぞ平民以下だ。それも二股の発覚がメイドの責任だあ？ 甘つたれんな。女ぐらい自分で何とかしやが

れ。」

ギーシュはそう言われてうつむく。

その態度がただ決闘に負けて悔しいだけなのか、俺の言葉の意味がわかったからなのかもわからないが、これで無理に平民がどうたらこうたらとは言わないだろう。

「で、どうする？ 身一つで決闘って見るか？」

「・・・ああ。先に言わせてもらうけどさっきは僕が悪かった。後で3人に謝るよ。」

周囲がどよめく。貴族が平民に謝ることはこの世界じゃまずあり得ない事なのだろう。

「そういえばまだ君の名前を聞いてなかったね。」

「ああ。俺は才人。平賀才人だ。」

「・・・では。」

「「勝負ッ」」

数十分後・・・

全身くまなくあざだらけになった俺とギーシュは結局引き分けとなり、ギーシュがケティ、モンモランシー、シエスタに謝った後、解散となった。

俺は結局9mm拳銃を使った事を日向にたしなめられ、ルイズには泣きつかれた。

だがその後刀を日向に返したあと、ルイズがとにかく保健室であざとこぶを治して来いといわれ、渋々と保健室へ向かった。本来なら平民が絶対に使用できない保健室らしいのだが、保健医（推定年齢23歳の美人）が俺とギーシュの決闘を見ていたらしく、カッコ良かったからいつでも遊びに来ていいといわれてしまった。

ただ拳銃を使っただけなのだが・・・。
その後何分か保健医の人と話しているとギーシュが保健室に入ってきた。

「よおギーシュ。お前も・・・なんかさっきよりひどくなってない

か？」

「ああ。才人か。モンランシーとケティにしこたま殴られてしまっ
てね。才人は恋人か何かはいないのかい？」

「いいや。彼女いない歴〃年齢だからな。たぶん30歳になったら
魔法使いになれると思う。」

「やつぱり君の世界にも魔法があるんじゃないか。」

あ、2ちゃん用語はダメか。

「ああ、ただの伝説(?)だ。実際になつた奴はいないよ。」

「そっか。ああ。そういえば君の銃は一体どういう仕組みなんだい
？」

俺の腰のホルスターに視線を向けながらギーシュが問う。

そういえば残弾0のままだ。

「これはな、この9発入りの弾倉をこのグリップの中に押し込むと、
弾が銃の中に入る。」

そう言つて弾倉を装填するとカチツと小気味よい音がる。

「んで上のスライドを後ろに引くと弾が薬室チャンバーに装填されて、引き金
を引けば弾が発射される。」

話し通りの動作をしてギーシュに見せる。もちろん安全装置も掛け
た。

「このほかにも連射が出来るやつとか120mmの弾が出るやつも
あるぞ。」

「これはずいぶん精密な銃なんだね。土のメイジだから金属の中は
ある程度見えるんだ。」

「そりゃ整備のとき便利だな。・・・そろそろ帰るか。」

「改めて、今日はすまなかつた。これからは平民とか見下さないよ
うにするよ。」

「分かればいいさ。」

なかなか分かるやつじゃないかと思ひながら、俺は保健室を出た。

職員寮 才人、日向の部屋

「な、何やってんだ？」

部屋の中にはさつき輸送機の中に積み込んだ銃器が何かごとに分けられておかれていた。

「ん？ あ、お帰り。使える銃器の整理をした。その4.6m弾使うMP7は弾の補給が無いからついている弾倉しか使えないし、このAK47なんてボロボロだよ。撃つたら暴発する。それらに比べて64式と89式はほとんど無傷だな。全部で20丁近くある。MINIMIなんて5丁もあつたぞ。」

「つていうか、良く一人で運べたな。」

「いや。その嬢ちゃんが手伝ってくれた。」

俺がふと横を向くと青い髪が特徴的な小柄、しいて言えば幼児体型……

「失礼なことを考えていた……？」

「いいえ……。お名前は？」

「……。タバサ。」

タバサねえ。何とも偽名臭い名前だ事……。

日向を見るとそうだと目で言っている。日向の様子からするとそこは別に警戒する必要はないだろう。

「手伝ってくれてありがとう。」

「レピテーションを卦けただけ……お礼を言われるほどではない。」

「そ、そうなのか？ ま、まあ一応手伝ってくれたんだからお茶でも飲んでく？」

「……。いただく。」

俺は輸送機にあつた電気ポットに水を入れると旗と思いなおす。

……電気が無い。そこへ日向が無言でソニーの高性能バッテリーを持ってきてくれた。電気ってありがたいね……。

しばらくすると蒸気が出始めたポットを見てタバサが驚いている。

「……。これ、どういう仕組み？」

さすがに俺は電気ポットの仕組みは知らない。無視してお茶を入れる。

玄米茶の茶葉（これも輸送機にあった）を急須（これも輸r y）に入れて湯呑（これもr y）にお茶を注ぐ。うん、いい香りだ。ちなみに言っていると俺は玄米茶が大好きである。

「どうぞ。」

タバサが小さな手で湯呑を持ち、お茶を飲む。

目が驚きに見開く。

「……おいしい。」

おお！ 外国人（？）が始めての日本のお茶を飲んでそんな反応をするのは初めて見たぞ。大体が苦いって反応だからな。

さて、

「で、君はどうして僕たちを手伝ってくれたのかな？」

日向と俺の台詞が被った。

決闘、んでタバサ登場！！（後書き）

・・・という事でなんかおかしい決闘編でした。
作者も玄米茶大好きです。

ではまた次回。

ご意見ご感想お待ちしております。

新居と弾薬製造（前書き）

東北・関東大震災の被災者の方々、深くお見舞い申し上げます。

ッと言うわけで、そのせいでなかなか更新できませんでした。
申し訳ないです。

ではございぞ。

新居と弾薬製造

Sideコルベール

「これを錬金か・・・。」

そう唸る私の前にはテーブルの上にある6本の金属、そして少しにおいがきつい液体が2種類。

金属の方は5.56mm弾と7.62mm弾、9mm弾、12.7mm弾、20mm弾、そして今日になってヒュウガ君が持ってきた4.6mm弾、液体はいわずもがな軽油とジェット燃料である。

構造と成分だけなら錬金と火の魔法の応用で考えた構造探知で知ることが出来るが、この私の技量をもってしても1mm単位での調整がやつとである。0.1mm、さらには0.01mm単位での錬金など不可能だ。改めて彼らの世界との技術格差を思い知らされる。

だが此方の軽油とジェット燃料なら、土からでも錬金出来る事が分かった。元種となるこの液体があれば、生産能力はもっと上がるだろう。その場合たくさんあったらたくさんあっただけ効率は良くなる。そのおかげで、現在樽7本目の軽油錬成を終えたところである。さて・・・この弾をどうやって製造するか・・・。

ん・・・金属の部品を錬成するんじゃなくて、ゲルマニアの様な製鉄技術で作るならいいかもしれない。

・・・だがこの国の技術では鉄を作るのが限界だ。何か代わりになる物は・・・。

そんな私の目にある物が止まった。

ガリアから直入してきた火石の塊である。たった200gを手に入るのに2年もかかった代物だがこの際使ってみよう。

これなら火薬や信管の製造も必要ない。安定した供給にはもっと大量の火石が必要なのだが、それはヒュウガ君に相談してみよう。さっそくヒュウガ君に報告しなくては。

「コルベール先生。よろしいですか？」

誰だ!?

「ロ、ロングビルさん。何の用ですか?」

全くきれいな人ですな。一体こんなときに何の用なのでしょう。

「学院長がお呼びですわ。それを伝えに来ただけです。」

「あ、ありがとうございます。」

弾のサンプルはまたあとでいいですよ。まだ余裕はあるようですし……。

Side out

「で、君はどうして僕たちを手伝ってくれたのかな?」

声が重なっちまった。どうやら才人も何か理由があるんじゃないか気になったみたいだな。

タバサは驚いたように俺たちを見ていたが、やがて口を開いた。

「私の母を助けるために、あなたたちの竜の力を貸してほしい。」

……場の空気が固まった。

あれを使って母親を治療するための薬を渡してもらったか?

あれを使ったら、最悪ガリアが滅ぶぞ……。

「あのな……。悪いがあれは生き物じゃないんだ。この世界で言う馬車みたいなもので……。馬車とはまた違うが、空を飛ぶ荷車みたいなもんだ。それに竜じゃねえからともと戦闘用に作られた物じゃないし、君にあれは扱えない。」

それを聞いたタバサは少し落ち込んだようだが

「それならあなたたちの力を借りたい。」

と、食い下がる。

母親が実の伯父に心を狂わされた事は同情するが、此処で治療を敢行すると原作に影響が出る可能性がある。いや。絶対に出るだろう。才人は俺に意思決定を任せているのか、何も言わずにこっちを見ている。

だが原作がどうのこうのというのはタバサには教えられない。なの

でそれを断ろうとした。その時、

コンコンッ

「ヒュウガ君、いるかい？」

扉が開け広げられ、コルベール先生が入りこんできた。

「コルベール先生。どうしたんですか？」

「それがヒュウガ君が頼んだ格納庫と滑走路と家が完成したと学院長から話があつてね。それを伝えに来たんですよ。」

「あ、ありがとうございます。ずいぶんと早かったですね？」

「今日はいろいろ暇な日だったからね。教師も暇つぶし感覚だったのでしよう。」

「分かりました。今から行きます。タバサ？ 今から輸送機を動かすに行く。とにかくこの件は僕たちの手に負えない。お母さんは自分の手で何とかするんだ。そうすればいつか助けられる時があるかも知れない。」

タバサは少しの間考えた後コクリとうなずいたのを確認すると、念のため拳銃を腰につけて、部屋を出た。

それにしてもこの世界に来てまだ2日。タバサとはほとんど面識が無かったのにどうしてこんな核心に触れるような事を教える気になったのだろうか。タバサはもう少し、慎重な人間だったと思うのだが。。。

学院外

「おおっ！ すげえ！！」

学院のすぐ隣に建設された3000m級の滑走路はまごうことなく真っすぐでたいらな滑走路であつた。

滑走路脇にある格納庫兼エプロンは木で出来た簡素なものだと思つたのだが、ちゃんと石・・・コンクリートかもしれない材質で、とても丈夫なものだつた。最後に、滑走路とは少し離れたところにある家は木造二階建てで、暖炉がついているものだつた。風呂はなかったが、あとで原作のように五右衛門風呂を作ればいいだろ

う。

「みなさんありがとうございます。平民みたいなものなのにこんな好待遇をしていただいて……。」

「いえいえ。私たちの職場を守ってくれたお礼ですから。これからもお願ひしますね。」

あ……あんまり俺たちに押しつけられると困るんだが……。大きな借りを作ってしまったかも知れない。

「あ……はい。こちらこそ……。」
まああとで考えよう。

「では輸送機を動かしてしまいますので少し離れていてください。」
そう言つて滑走路の脇に駐機してあるC-5まで駆け寄ると、ハッチを開け内部に入る。念のため燃料計を見るとメインタンクに燃料が5分の4ほど、予備タンクには満タンの燃料が入っていた。全部満タンにした状態で350tを積載。その状態で2万km以上も継続飛行できるから、当分は補給の心配が無いだろう。
軽油はそのうちではないのだが。

「アーリイ。起きてるか？」

「……。」

「6話以上も出番が無かったからつてむくれるなよ……。」

『そんなことないです。』

ほんとかよ……。

「まあいい。今から機体を格納庫に入れるからな。駐機ロックを解除。エンジン点火用意。」

『メインタンク、エンジン接続。燃料温度異常なし。エンジン点火用意よし。』

「よし。エンジン点火。出力2%で固定。」

『了解。出力2%。』

キィィィン

甲高い音が聞こえ始めると同時に機体がゆっくりと進み始め、格納庫に近づく。

そのままの状態で500mほどの距離を走り、格納庫の中に機体を入れると、次は機体を反転させて次の出撃を円滑に行えるようになる。

「第1から第4エンジン逆回転開始。右回転180度。」

「自動コントロールに切り替えます。右180度反転……」
反転完了。」

「よし。燃料噴射カット。後部ランプを開けた後、スリープに入ってくれ。」

「次から出番は下さいよ。」

「善処する。って俺じゃなくてカトタクに言ってくれ。」

「了解。後部ランプ解放。スリープに入ります。」

ふーっ。後は機体に入っている荷物を新居の中に運び入れるだけか。家には地下室もあるみたいだしな。

そのあとは才人と二人で、4両の車両と大小様々な銃器や機械を家の中や家の横に設けられた既に運び入れた。当分の間は既を駐車場とすることになるだろう。

「ヒュウガ君。もういいかな？」

振り向くと、何やら大きな箱を抱えたコルベール先生が後ろに立っていた。

「あ、コルベール先生。良かったら家に入ります？ お茶でも出しますよ？」

「そうかい？ ふむ。ではお言葉に甘えて。」

先生を新しい家の居間に案内する。先生たちが作った家なんだけだな。

才人は職員寮に置いてきたパソコンを取ってくると言っていたので今此処にはいない。

「それでどうしたんですか？」

「……それがヒュウガ君が持ってきてくれた弾丸なんだが、錬金が非常に難しく、我々の様な技術では安定した生産は不可能だと分かったのです。」

そうか。原作でも20mm弾の製造は出来なかったからな。

「しかし・・・」

しかし・・・？

「ガリア王国の近くで採掘される火石を使えば、弾薬の安定生産が可能であることも分かったのです。」

おお！！ これは言いニユースだ。

「ですが・・・。」

ですが・・・？

「手持ちの火石は200gしかなく、これではせいぜい60発作ればいい方なのです。」

「安定した製造するにはkg単位で必要だという事ですか。」

「そうです。しかし火石の採掘地はオークやコボルト、火竜などが生息していて、とても危険で、最近では風竜の目撃情報も入っています。だから此方では全く火石が手に入らないのが現状なのです。」

・・・うーむ。聞いてる限りじゃ弾薬を使えば生物はどうにかなるが、原作介入が極端に少なくなるよなあ。俺一人じゃ行けないからって才人もつれていけばルイズの身が危なくなるし・・・。

・・・宝探しのときに済ませてしまおうか。

「・・・あと数カ月後に出発します。必ず火石を採掘してきますので、弾薬の製造はお任せします。」

「分かりました。では出発するときは一言声をかけてください。」

「はい。ありがとうございます。」

これで本当に弾薬の製造発注が終わった。

それまでは弾薬は節約しないとな。

「それで、練習としてこんなものを作ってみたのだが、どうだね？
コルベール先生はさっきの箱の中から、真鍮色に光る金属を・・・
5.56mm弾じゃねえか。」

「どうしたんですか？ これ。」

先生はニヤツと笑うと、

「使用する火石の量を10分の1以下にした模擬弾ですよ。先端は皮で出来ているからあたっても怪我はしません。訓練で使えるでしょう。構造も簡単で火薬使用ですから、大量生産も出来ます。こっちの皮がついていない方は貫通力はあまりありませんが十分殺傷力を持つている弱装弾です。火石は通常の3分の2程度になっています。この箱に製造ライン第1弾の220発が入っていますから、使ってください。模擬弾も此方の箱に300発入っています。他の種類の弾も、これから1週間おきにお届けしますのでよろしいですか？」

「……先生。凄いですよ。」

「あ、ありがとうございます。ってかこれで十分じゃないですか？火石なんて必要ないじゃないですか。」

「いえ。あなた方の世界のように、一度に何マン発もこの方法では生産できません。その点火石を使えば一度に数万単位での生産が可能です。」

「……数万ですか。いや此方の世界でもそんな一度に……。」

「いいじゃないですか。作るに越したことはないでしょう。」

「……そうですね。」

節約する必要があるのか疑問に感じてきた。

ツと才人が帰ってきた。

「喜べ才人！！ 弾の安定生産が整ったぞ。」

「そうか！！ よかった。」

「お役に立てて良かったです。では私はこれで。」

「ありがとうございます。また来てくださいね。」

「これ、本当に使えるのか？」

俺たちは居間に残された2つの箱の中身を確認していた。

今回は全部5・56mm弾だったみたいだ。さすが主力弾薬を分かってらっしゃる。

「ちょっと使ってみるか。」
トリストイン製5.56mm模擬弾（才人命名）を地球製のSTANAGマガジンに詰め、宝物庫にあった89式小銃に装填する。もちろんしっかりと整備してあるものだ。
家の外に出て滑走路上の200mほど離れた所に的を立てると2脚を立てて伏せ撃ちの体勢になる。

「いいぞ。撃て!!」
ちなみに撃とうとしているのは才人である。

才人、信じてもない神様にお祈りするのはやめる。気持ち悪いぞ。

「才人!! 撃ちます!!」

そう言つて才人は思いつき引き金を引く。

運が悪いと暴発して顔がぐしゃぐしゃになる。

才人の運命は………

タタタタタタタタタタ

暗くなつてきている滑走路に線香花火ほどのマズルフラッシュが迸り、才人の顔が助かったことを証明した。

「……良かった……」

「しつかり的の真ん中に当ててやがる……」

才人の技量は決してガンダールヴだけのものではないだろう。

「次は俺か……」

才人が模擬弾のテストをしてくれたので、俺は弱装弾のテストをすることになる。

失敗の確率は才人のおかげで少なくなつたが、その分失敗したときの被害は大きい。

何しろ実弾の4分の3もの火薬が入っているのだ。

「いいぞ。日向。」

神様………

「祈るなよ。」

才人にさっきの仕返しをされた。
つたくやればいいんだろ。

才人と同じように伏せ撃ちの体勢になり、弱装弾の弾倉を装填する。
照準器を使つて的に照準を定め・・・
引き金を引き絞る。

ズダダダダダダダッ

さっきの模擬弾とは比べ物にならない音とマズルフラッシュが迸り、
滑走路にあるのが粉々になる。こつちも正常な弾である事が証明
された。

やっぱりコルベール先生は天才だ。

「大丈夫か？」

「おう。」

「この模擬弾は学校で使つてた模擬弾より反動が強いな。下手したら暴徒鎮圧用に使えるかも知れない。」

「こつちの弱装弾はほとんど実弾と変わらないぞ。十分使用に足りる。」

「今度ギーシュとやり合つてみるか。」

ワルキューレが使えたらいい訓練にはなるな。

「そうだな。今度頼んでみよう・・・あとはミサイルか。」

何百年も前から使われている弾薬の製造は間に合ったが、つい最近
使われ始めたミサイルの製造はこう簡単にはいかないだろう。とは
いつても俺はそこまで心配してはいない。原作では竜の羽衣につけ
る魔力誘導式空対空ミサイルの開発にコルベール先生は成功してい
るのだ。時期に地対空ミサイルや多目的大型ミサイルの予備弾も作
ることが出来るだろう。

・・・そういえば次の原作イベントはデルフリンガーの購入か。
また原作との差異が無ければいいが・・・。

新居と弾薬製造（後書き）

あんまはつきりしない話でした。
色々突っ込むところがあるとおもいますが、突っ込まんといってください。

次はいつになるかな？
もちろん次はデルフゲットです。

生存者発見！！（+デルフゲット）（前書き）

長らくお待たせいたしました。

東北地方の方々、いまだ大変な生活が続いているでしょうが、どうか無理をなさらないよう、気を付けてください。

ではござい。

生存者発見！！（+デルフゲット）

「ルイズー、いるかー？」

弾薬の製造についてコルベール先生から聞いた翌日、つまりこつちの世界に来てから3日目なのだが、時系列がごっちゃになっているのに気付いた。今日は虚無の曜日だったのである。

確か原作では召喚されてから最低でも4日は立っていたはずなのだが・・・それで今日デルフリンガーを手に入れないと、近く迫っているフーケ戦に持ち込めないことがわかったのだ。まあ、剣がなくても11式携帯地对空誘導弾とかM72 LAWで一撃必勝になるのだが、それだと才人に花が持たせられない。それだとあまりにも可哀そうだ。なのでルイズの部屋に来て町まで行きたいと頼もうとしたのだ。

「別にいいけど町まで歩いて2日もかかるのよ？ 馬があれば2時間だけでもみんな使ってるからもう残ってないわよ。」

「まじかよ。・・・ンじゃ車出すからいいか？」

「車って・・・荷車だけあったってしょうがないでしょう。」

「いいからいいから。準備しといてな。」

普通に町に行くだけだからあれでいいか。

「才人。車出すから荷物用意しといて。」

「はいよー。」

才人に準備を依頼してから、既の中に入って車を出す。

選んだのは21式重装高速高機動車だ。まあ、そのほかの車両は戦車とかミサイル発射管制車とか移動には向かない車両だったからだ。73式中型トラックでもあればいいのだが・・・。

「おい。日向。」

「なんだ、才人。」

「これで・・・行くのか？」

そつだがどうしてそんなことが気になるのだろうか。

「リモートウエポンM134ミニガン2基に74式車載7.62mm機関銃2基さらに4連装対戦車ミサイルランチャー2基装備の重武装車両で異世界の町を往来するのか!？」

「句読点つけないと読みづらいぞ才人。それにこれしかねえんだよ。それとも戦車で行くのか？」

「さすがにそれは……。」

「なら我慢だ。」

どつかでへりか一般車両は手に入らないかな……。

ちなみにC-5は現在格納庫で20mm弾を満タン、指向性音響閃光三式弾を2発装備した状態でスクランブル待機になっている。

現状空戦力がC-5しかない俺達は輸送機を臨時制空戦闘機として使用していたのだ。

対空火器としてはC-5の全方位フェイズド・アレイ・レーダーと連動させれば21式のM134があるが、発射速度の速いM134は7.62mm弾を使用しているため、竜の鱗を貫通できるか多少疑問となっている。M2もあるのだが、こちらは12.7mm弾を使う代わりに、発射速度が遅くて風竜などの高速種には対応できない。したがってC-5しか対空ミッションには参加できないのである。

せめて対戦車へりさえあれば運用はもつと楽になるのだが……。ないものねだり……。探せば意外とあるのかもしれないが、しょうがない。

さつさとデルフを頂戴しに行きますか。

「準備できたわよ、二人とも。」

つと言つても外見は魔法学院の制服のまま。

多分財布とか部屋の片づけのことを言っているのだろう。

「よし。ンじゃ行くか。」

才人を助手席に座らせ、ルイズを後部座席に座らせる。

俺はエンジンをかける。

軽油はコルベール先生の努力でタンク10個分はあったので、心配はする必要がない。

「これつてもしかして馬が引く乗り物じゃなくて、自力で動くものなの？」

「そうだよ。馬車より断然速いし、乗り心地もいいはずだぞ？」

「・・・完全な装甲車だけだね。」

「余計なことは言うな。行くぞ。」

アクセルを踏み込んで、王都トリスタニアへ向かう。馬で2時間なら車で1時間ぐらいだろう。

「・・・見通しははまだ早かったかもしれない。」

「前にいるのは盗賊つてことでもいいんだよね？」

「ああ。でも賊なんて立派なものじゃないな。ただの強盗だ。」

車の前には10人ほどの強面の男が立っている。真ん中の男が何やら中の積み荷と女を降ろせば命を助けてやる的なことをしゃべっている。

積み荷なんて弾薬と自動小銃ぐらいしかないっての。

「・・・ま、かなり高いけど。」

「どうするのよ!! 私魔法使えないのよ!？」

「大丈夫だよ。機関銃でミンチにできるから。」

「・・・まあ中国の15mm機関銃も防げる装甲があるならわざわざ戦う必要もないだろうけど・・・。」

相手がメイジだったらそうもいかないけど・・・やっぱりそうもいかないみたいだ。

「おいおい。あれ杖だよな？」

10人中8人が杖のような棒を懐から取り出す。なんか・・・後の二人はこの集団でうまくやっていけるのか心配だな。

「そうね。殺るなら早めにやったほうがいいわよ？」

「字が違う気がするが・・・突っ切るぞ!!」
「パァ　!!」

クラクションを鳴らしながら集団に突っ込む。
そのとたん氷の矢が飛んできた。

直径120mmを優に超える氷柱である。

「やばっ!!」

車体の上に装備されたカメラが氷柱を認識し、モニターにロック標
示がされる。

「もらった!!」

才人がすかさずトリガーを引きその瞬間M134ミニガンが毎分3
000発の速度で7.62mm弾をはじき出す。

氷柱は粉々になってあたりに飛び散った。

「サンキュー才人。攻撃手はお前に任せる。殺すなよ!!　足元狙
って追ってこさせるな!!」

「りょーかい!　ンじゃまずあそこから・・・。」
「バババババババ」

あまりに速い発射速度で銃声というよりシャワーの音のような音が
あたりに鳴り響き、そのたびに盗賊達から悲鳴とどなり声が上がっ
た。

そんなに怖いならさっさとあきらめろよ。

ちなみに才人はリモートコントロールで車内のコンソールからミニ
ガンを操作しているので特に危険はない。

「お、やっとなあきらめたか。日向、もう大丈夫だと思っぞ。」

バックミラーを見ると、盗賊達が遠くへ逃げていくのが見えた。

「大丈夫か?　そんじゃ一回止めるぞ。」
車をいったん止めると被害を確認する。

「まあ、こうじゃないと困るんだけどな。」
物的被害は皆無だった。弾薬の消費ということを見ればその限りで
はないが・・・。

そもそもこの車輛は2014年に起こった第二次日中戦争が終わっ

た後開発・製造された高機動装甲戦闘車だ。PKFで実戦を経ているからそれなりの信頼もある。それが氷なんぞに破壊されちゃあ・
・困るだろう。ってか情けないだろう。

「弾はどのくらい使った？」

「ざっと700ぐらいかな。1000連ベルトマガジンが少し残ってる。」

「連射14秒分か。まあまあか。よし。出発するか。」

俺達は再び車に乗り込むとトリスタニアに向けてまた走り始めた。

結局盗賊との戦闘を含めて1時間で王都トリスタニアに到着した。そこで気付いたことだが……。

「み、道が狭い……。」

そうなのである。

原作でも才人が言っていたように王都の中央通りは日本の1車線半ほどの広さしかないのである。そこへ普通乗用車より横幅の大きい高機動装甲戦闘車が入り込むとどうなるかはもうおわかりだろう。大渋滞であった。

「いつそのこと対戦車ミサイルでもぶち込んで人を追い払うか？」

「才人。何気に物騒なこと言っんじゃねえよ……。ルイズ、まだなのか？」

「もうすぐよ。その角をまがったところにあるはず。」

ルイズが示す角はどう見てもこの車が入れそうにない路地である。そもそも入れたとしても出てこれなくなる。

「あの角は曲がれるかな……。曲がれなかつたらその入り口で待つてるからな。」

「日向はどうするんだ？」

「別に俺には軍刀があるし。武器は要らないよ。面白いのがあったら教えてくれ。……それと、万が一地球の武器があったらすぐに連絡してくれ。買い占める。」

「お・・・おう。」

そういつてから路地の入口に車を止め、二人を降ろす。なるべく早くするよう言っておいた。

二人を見送った後車の中で何をしてもなくじつとしていたのだが、人ごみの中にふと異和感のある服を着た男を見つけた。

外見は路地の裏にいるような浮浪者だが、来ている服はボロボロの・・・迷彩服。方には見慣れた白地に赤の国旗。これもボロボロになっている。手には杖かと思っていたのだが砂漠用迷彩を施した89式小銃が握られている。これで分からないほうがおかしいが、間違いなく陸上国防軍人である。

それにさつきからじつとこっちを見ているのだ。周りの珍しいものを見る目ではなく一種の戸惑いと懐かしみがこもっている目だった。案外車の近くにいたので男に近づき敬礼する。

「私は日本国陸上国防軍富士340輸送飛行隊所属、秋本日向1等陸佐です。そうだと思いますが、陸上国防軍の方でよろしいですか？」

「・・・はい。陸上国防軍中国先発派遣特別編成旅団所属、小川仁1等陸佐です。」

「中国先発派遣隊・・・。失礼ですがいつからここに？」

「約3カ月前です。」

え？ 日中戦争が終わったのは約9年前。それなのに3カ月前って・・・。

「あなたがここに来る前、地球では西暦何年でしたか？」

「2014年でしたが・・・。中国に派遣されてすぐ後の戦闘で爆発に巻き込まれたと思ったら、すぐその森で仲間といっしょに倒れていたのです。」

2014年・・・戦争が始まった年である。彼の話がほんとならこの世界に来る人には時間のずれがあることが考えられる・・・。

いやそんなことより・・・。

「仲間と言いましたか？」

「はい。正しくは私の小隊に所属する部下5名です。他の隊員は見つからず、ここに飛ばされたのはこの6人ということで落ち着きました。」

「今その5人はどこに？」

「私と一緒に近くの隠れ家で生活していますが、内1人が高熱を出したまま原因が分からないので3日も熱が下がらないのです。軍人ですから不衛生の耐性は一般人より上のはずなのですが……。この世界のお金もほとんど持っていないので医者にかかることもできず……。」

「患者はどのように？」

「達の悪い伝染病だと空気感染などの可能性がある。もっとも現代人である小川がそれを知らないわけがないが。」

「部屋を隔離して中に入るのは部下の内一人と私だけに限っています。もちろん接触した後はアルコールでの消毒を行っています。」

「……。わかりました。ですが彼を運ぶのに座席が足りないのです。」

「高機動装甲戦闘車の定員は座席を付けた状態で5人。俺と才人とルイズと中国先発派遣隊の5人では明らかに席が足りない。」

「車両が必要ななら隠れ家にあります。ただし軽油がほとんどないので2時間ぐらいしか動かせませんが……。」

「2時間あれば十分です。さっそく支度を。この情報統制機器を持っていてください。俺の連れのほうから連絡を入れます。連れが戻り次第後を追いますから。」

「ありがとうございます。ではまたあとで。」

「……さて。早く魔法学院に戻らないと。」

「待たせてわるかった、日向。」

「まったくそんなぼろい剣を買っなんて……。」

隣にはタイミング良く帰ってきた才人とルイズが。

「しっかりデルフも手に入れたようだ。」

「才人、たった今国防軍人が6人この世界にいることが分かった。」

ただしそのうち1人は重い病状が出ているそう。そこで彼らを魔法学院に連れて行き、治療をしたいと思う。先生に頼まなくてもC-5に薬品ならあるから。いいな？ わかったら早く車に乗れ。追うぞ。」

一気にまくしたてるとまだ状況が飲み込めない2人(と1本)を車に押し込んで急発進する。

俺の情報統制機器の位置反応はこの先600mの位置で少しの間とまってから、だんだんこちらに近づいてきている。そして十数秒後、真横に現れた車両は96式装輪装甲車だった。

『こちら小川。秋本一佐、聞こえますか？』

『こちら秋本。患者の容態はどうだ？』

『少し過呼吸気味ですが安定はしています。体温は未だ40度台。症状からするとやはりインフルエンザかもしれません。』

『インフルエンザか……。大丈夫だ。まずC-5の診察室でアーリーに診断してもらおう。それから適切な薬を処方できるはずだから。』

『C-5？ あの米軍の巨大輸送機ですか？』

『あ、あとで説明する。ちゃんとしてきてくれよ。盗賊に出くわしても突っ切れ。いいな？』

『りよ、了解。』

幸運なことに、盗賊などには一度も出くわさず、ちょうど40分後に学院に到着した。

滑走路を爆走して格納庫の前までくると、すぐに車から降りて96式装輪装甲車の後部ハッチを開けて患者を運び出し、C-5に運び入れる。才人とルイズには万が一にも感染しないよう部屋に戻ってもらった。俺達は全員マスクと手袋を装着している。

『アーリー！！ 急患だ！！ 診察システムを起動してくれ。』

『了解。メンテナンス室に移動してください。』

『ほら。メンテナンス室はこっちだ。』

メンテナンス室にはCTスキャナのような機械が一つだけおかれている。

本来は銃や機械部品などの内部や細部を調整するためのもののだが、人工知能をC-5に移植するさい、空いた情報区画に医療情報を組込んだのをはじめに、メンテナンス室には不必要なさまざまな機能が付け加えられたのだ。本物の技術者にお金を出して作ったわけではなく、空軍や陸軍のメカオタクが自力で作り上げたというのだから驚きだ。

それはともかく。

『地球上での一般的なインフルエンザだと思われます。このままの状態でも明日には熱が下がり始めるでしょうが、一応合成タミフル生理水を点滴しておくといいでしょう。この世界に来る前に感染したと思われます。』

「ありがとうございます。じゃあ、点滴を出してくれ。」

この機内では、パイロットが薬物に手を出さないよう、薬庫の中はアーリーの診察を受けた後、その症状にあった薬しか渡されないようになっていいる。今回も約1時間分の点滴が取りだされ、患者の静脈に注入されていった。

患者の名前は柴木亮。28歳の2等陸尉だそうだ。

他の4人はまだ聞いていないのでわからないが、後で聞いておこう。

「小川さん。」

「秋本さん。ありがとうございます。」

「いえいえ。いきなり飛ばされて大変だったでしょう。そこでどうでしょう。一応柴木さんの容態も安定していますし、隠れ家に残したものを取りに戻ってはいませんか？ここなら私たちの家で生活できますし、仕事もあります。」

「ありがとうございます。秋本さんさえよろしければお世話にならせていただきます。しかし・・・」

「しかし？」

「・・・荷物は、もともと装甲車につんであったものしかないので

す。後は最初にいた森にブラックホークとコブラが1機ずつだけで・

・
「

・
・
・
?
?
?
?
?
?
?

俺は小川さんの話に飛びついた。

生存者発見！！ (＋デルフゲット) (後書き)

どうでしょうか。

デルフゲットとか言っておきながらメインが変わってる・・・。

あれ？

どうしてこうなったんだ？

ご意見ご感想お待ちしております。

なんで異世界に来てまで現代戦をしなきゃなんないんだ！！（前書き）

クーガーが好きな人・・・ごめんなさい。

あと今回ゼロ魔要素ほぼゼロです。

そして更新の大幅な遅れをお詫びいたします。

ではございぞ。

なんで異世界に来てまで現代戦をしなきゃなんないんだ！！

「UH-60JAとAH-1Sがあるんですか!？」

「は、はい。一緒に飛ばされてきたのですがパイロットも燃料もないので移動できずにそのままになっています。」

「その位置は？」

「確かここに来るときに通りましたけど・・・」

「すぐに行くぞ!！」

もし本当にあつたら現状の空戦能力や輸送能力を一気にあげることができる。

これを逃す手はない!!

・・・と言んでいたのだが、高機動装甲戦闘車のエンジンをかけて走り出してから、どうやって運ぶのかを考えていなかったことに気づいて、一端学院に引き返したのは言うまでもない。

「どうしようか・・・。」

全く考えていなかった問題に頭を抱える。

「日向・・・そんな悩むなよ・・・。明日か明後日に現地で整備して飛ばせばいいじゃねえか」

「整備で何とかなるレベルならいいけどな。3か月も風雨にさらされたヘリがそうだとはとも思えん。」

「それじゃ輸送機で運べ・・・ないか。」

小川さんから聞いた場所は馬車がやっと通れる森の中の道。空からじゃ場所も見えないし、着陸なんて到底できない。

ちなみに今才人はゴミ置き場に捨ててあった大鍋で五右衛門風呂を作っている。

一度に2、3人は入れそうな鍋である。

それはそうと

「直せなかつたら頼むしかないか・・・」

もちろん学院ティーチャーズの方々である。

翌日、C-5からできる限りの整備器具を積み込んだ96式装輪装甲車と21式高機動装甲戦闘車は、小川さんに教えられた地点へ向かっていった。メンバーは俺と才人、小川さんと部下の1人、三好隼人2等陸曹だ。三好2曹はヘリのエンジンをいじったことがあるらしい。

取りとめのない会話をしながら地点へ到着すると、小川さんが、そばの茂みの葉を掴むと一気に引つ張った。するとそこには戦場で見慣れたUH-60J Aブラックホークと、AH-1S コブラが肩を並べて鎮座していた。雨から保護する為のシートと偽装用の網は掛けてきたようで、誰かに見つかったような形跡はない。

またシートのおかげで見た目にはほとんど故障は無いように見える。ちなみに2024年ではAH-1Sが完全退役し、AOH-1が主力対戦車/戦闘ヘリとして使用されている。

だがAH-1Sの武装も見たところ完全装備であることから、これも2014年の機体なのだろう。だが少し尾翼に描かれているマークに違和感がある。確かそこには日の丸が描かれていたはずなのだが金色で校章?のようなものが描かれている。あれ? なんか見たことあるような・・・。

「俺の学校の機体だな。無島高等学校航空部隊のだ。」
お前の学校は対戦車ヘリまで配備してんのかツ。

・・・そういえば退役した機体は私企業が購入して改修、再配備したってうわさがあつたな。私企業じゃなくて私立の小中高大一貫校だったが。

それはともかくUH-60JAはどこどころ被弾した跡があるが、いずれも胴体下部なので、エンジンには影響がないと思われる。

これは純粹に国防軍のものだ。
少し希望が見えた俺達は、さっそく整備に入ることにした。

・・・だがガンダールヴとヴァンドゥールヴ（原作はリーヴスラシ

ルだけど知らなかったのでスルー)である俺と才人はただ手で触れるだけ。

小川さんたちは何をしてるのかわからないみたいだが。

まずは才人の検分、AH-1Sは・・・

「エンジン、アビオニクスともに異常はないみたいです。けど長時間に及ぶ激しい動きが原因・・・だと思えますけど・・・で銃が2本飛んでます。ガトリング砲は残弾322。C-Nite F LIRとガンナー席のディスプレイの情報連動が若干遅れてます。ケーブルを変えれば問題ないレベルですね。ん？ AAM-3の携行も可能なように改修されてます。・・・こりゃあ俺のいた時代のコブラじゃないな。俺のころよりさらに改修されてる。あ、エンジンオイルの交換とバッテリーの充電、燃料の入れ替え、鋸を付け替えればすぐに離陸できます。奇跡的に飛行可能な状態ですね。」
よかった。肝心なコブラだけは手に入った。

三好2曹はなんだかよくわからないというような顔をしながらも、才人が指示したことをやり始めた。

次は俺の検分、UH-60JAは・・・

「機体下部に被弾45発。内貫通弾は28発。ほとんど墜落寸前で転移したみたいだ。燃料タンクにも被弾5発。幸いエンジンには被弾していないがただの整備じゃ離陸は無理みたいだな。一度C-5の格納庫で分解整備が必要だ。高機動車で運べるなら運ぼう。」
どうやら輸送能力の高いブラックホークは当分使用不可なようだ。

「さて。誰がコブラを操縦する？」

まあ操縦できるのはへりの免許を持つてる俺か才人しかいないのだが・・・。

「んじゃ俺がやりますよ。」

と、いうわけで才人がコブラを操縦し、残りは車での移動になった。だがUH-60JAは車輪があるにはあるものの、不整地で長時間動かすと壊れてしまう。

そこで才人に頼んでコルベール先生に荷車を持ってくるよう頼んで

もらつよう頼んだ。才人が了承すると、コブラは2枚のブレードを回転させて上昇し、あつという間に学院方向へ見えなくなってしまうた。

荷車が来るまで何もすることのない俺達は辺りの警戒をする。するとUH-60JAから200m位離れたところに車両が置いてあるのに気がついた。

「小川さん。あそこの車両は・・・？」

「・・・さあ？ 私たちがここにいた時はあんな車両ありませんでしたけど？」

「・・・ちよつと見てくるか。」

車両にあるナンバーは日本のものではない。11年前の戦争で嫌というほど目にした車両。

中国人民解放陸軍のものだった。

9mm拳銃を持った俺達は中国軍の車両・・・14式歩兵戦闘車の後ろに回り込む。

少なくともこの中にいるかもしれない中国軍人は2024年のものではない。中国軍は2015年に戦争に負けてから軍を解体され、敗戦後の日本と同じような警備部隊しか配置できないようになってるからだ。

その際、このタイプの車両はすべて破壊されている。

それにこの車両は“14式”歩兵戦闘車だ。戦争当時とちよつと一致する戦闘車輛だから2014年の軍人で間違いない。

敵意のない軍人を攻撃する危険がなくなったところで小川1佐がドアを開けて一気に突入する。

中には3人の男が陣取り、缶飯を食っていた。

よほどの世界に油断していたのだろう。たった200m先にいる俺達に1時間以上気付かなかったのだから。

男たちは一瞬俺達をなんだ？ とでも言いたげな目で見てから、肩

についている日本の国旗と迷彩服、俺達が手にする9mm拳銃を見ると、あわてて彼らの銃を拾おうとする。

俺はそいつのそばにある缶飯を撃ち抜き威嚇する。

「我々は日本国陸上国防軍のものだがこの世界に来てしまったからにはあまり君たちと敵対したくない。頼むから抵抗せず、我々の話を聞いてくれないか？」

この世界ではたった1丁の銃が脅威になるため、現代兵器の使い方が分かる彼らを放置するわけにはいかず、取るべき選択肢は仲間に引き込む以外なくなる。

「どこまで信頼できるかわからないが。

だが彼らにその気は全くないようで、少し目を離したすきにいちばん左の男が腰に挟んでいた拳銃を撃ってきた。

弾は外れ、歩兵戦闘車の天井に当たって跳弾し、火花を上げる。

「畜生！！」

一人が撃つと他の軍人も撃ち始める。

「撃て撃て！！」

俺達は拳銃だけで中国軍に近づいたことを悔みつつ、96式装輪装甲車まで後退する。

ここまでくれば12.7mm重機関銃M2の支援が受けられる。

「伏せろ！！」

一番早くM2にたどりついた三好2曹がそう怒鳴ると同時に大量の12.7mm弾が中国軍人の足元に浴びせられる。

すると一番前にいた軍人が、後退するような指示を後ろの軍人に送る。その先にあるのは・・・当たり前というかなんというか14式歩兵戦闘車である。

歩兵戦闘車とは歩兵の支援をするための車輛であるからして、その前面には25〜40mmクラスの機関砲が装備されている。今回は35mm機関砲であるのだが・・・。

賢明な読者はもう気づいていると思うが、96式装輪装甲車の防弾

性能は小銃の弾をはじく程度のものである。実際2020年のPKO派遣では12.7mm弾を防ぐのが精いっぱいだった。

また俺達の乗ってきた21式高機動装甲戦闘車でも中国の14mm機関銃の防御が精いっぱい。その程度の装甲が35mm弾を防御できるとは到底思えず、必然的に逃げる必要が出てくる。

「て、撤退!」

だがすでに遅く、ズドドドツという音とともに35mm弾がばらまかれ、96式装輪装甲車の車体がボロボロになって飛び散る。だが高機動車はまだ無事である。固定化をかけると35mm砲も防げるのだろうか。

ちょうどその時、俺達を倒せたと思ったのか機関砲が停止する。

(今だ!! 高機動車へ!!)

目線だけで後の二人に合図すると、高機動車に滑り込む。

エンジンをかけるがからない。・・・まさか。

案の定燃料タンクは空になっていた。オスマンの固定化といえど35mm砲は防ぎきれなかったようだ。だが爆発しないところをみると、コルベール先生特製の軽油は外部からの熱エネルギーでは揮発しないようになっていたらしい。だが依然危機的状況であることは変わらず・・・

「クソ!! なんでファンタジーの世界に来てまで現代の戦闘をしなきゃなんなんだよ!!」

悪態をつきながら戦闘席のディスプレイをタッチしてM134ミニングガンを作動させ、歩兵戦闘車のタイヤに向けて撃ちまくる。だがいくら撃つてもパンクしない。一体どんなタイヤ使ってるんだよ・・・

。7.76mm NATO弾が直撃してるのに・・・。1000連べルトマガジンはまたたく間に無くなり、補充をしなきゃ無くなるが、今回は予備がない。

万事休す。マジで。

ラット（01式軽対戦車誘導弾）積み込んでけばよかった……

ひとつ気付いたことがある。上空から聞こえるローター音はなんだ？

「才人。もしかして……」

「無線入れっぱなしで何やってるんですか！！　なんか銃声聞こえるから戻ってみたら96式は破壊されてるし。外に出てるなら伏せて耳塞いどいてください！！」

才人が乗ったAH-1Sコブラが翼下に吊下されたミサイルポッドの中のヘルファイア対戦車ミサイルを発射する。1撃で歩兵戦闘車は粉々に吹き飛んだ。

「破壊した戦闘車の後方20に敵兵3。攻撃しますか？」

「頼む！！」

「了解。」

AH-1Sは俺達の頭上をフライパスすると、低空飛行で歩兵戦闘車の後方へ進む。すると敵兵の方角から散発的な銃声が響いたが、その直後、AH-1SのM197ガトリング砲の発射音の後、それは沈黙した。

「障害の排除を完了。燃料がやばいんですぐ帰還します。」

「ああ。助かった。」

まだ学院に帰るだけなので、燃料はほんの少ししか入れていないのだ。ほんとにギリギリなのだろう。

その後、俺達は96式装輪装甲車をあきらめ、21式高機動装甲戦闘車の燃料タンクを応急修理し、予備の燃料を補給して、帰途に就いた。UH-60JAはその翌日、コルベール先生に頼んで、大型の荷馬車を持ってきてもらい、金属材料で補強してから、高機動車で引いてそれに積み込んで学院まで持って帰った。

UH-60JAはその甲斐あってその翌々日には離陸できるようになり、M134を装備した状態で飛行場に常駐するようになった。

あと報告することと言えば、才人が五右衛門風呂を完成させて久し

ぶりの風呂に入れたことぐらいか。小川さんや回復した柴木2尉も
ほぼ3カ月ぶりの風呂に涙を流して喜んでいた。

で、才人はどうして五右衛門風呂の作り方なんて知ってたんだろう
？

なんで異世界に来てまで現代戦をしなきゃなんないんだ！！（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

意外な仲間（前書き）

長らくお待たせしたこと、申し訳ありません。

なかなかアイディアが出なかったものでちょうど5カ月間放置したままでした……。

その間定期テスト・模試は通算8回で、まあ余裕がないという言葉い訳と感じていただければ幸いです。

ではどうぞ。

意外な仲間

「「使い魔品評会？」」

UH-60JとAH-1Sを手に入れてから数日経ち、学院での生活にも慣れてきたころ、ルイズからこんな言葉が飛び出してきた。

「そうよ。新2年生の使い魔を学校中にお披露目するの。・・・まあその必要もなく学校中から注目されてるけどね」

「反省も後悔もしないがな」

「反省位はしなさい、ヒュウガ」

使い魔品評会か。確か・・・やばい。展開が思いだせない。

「で、品評会で俺達は何をすればいいんだ？」

「適当に挨拶だけ済ませればいいわ。余計なこととして笑われたくないし」

「そんなんでいいの？」

「いいわ。どうせだれも集中して見てないわよ」

なんかこういうときに限って予想外のことが起こるからな。あとで小川さんたちとも相談してプログラムを作っておこう。

あ、ちなみに今は授業前の空き時間で、教室で教師を待っているとこらだ。なんだかんだで授業に出たのは、まだ2回目だ。小川さんこと小川仁 おがわじん 1等陸佐と、柴木亮 しばきりょう 2等陸尉、金剛颯 こんごうかえで 3等陸尉、三好隼人 みよしはやと 2等陸曹、安西啓太 やすにしけいた 2等陸曹、勝本幸兵 かつもとこうへい 2等陸曹たちは、完成即日に増築が施された格納庫横の我が家でくつろいでもらっている。厳密には彼らは使い魔ではないので、巻き込むことはできないのだが許してもらいたい。「おはよう諸君。それでは授業をおこないたいと思う。・・・ふむ、今日はその道化師たちも出席かね？」

ハハハ・・・と乾いた笑いが起こる。

「たく。教師が現れたとおもったら嫌味タラタラだな。それに道化

師つてなんだよと思う。確かに俺も才人も陸上国防軍の2号迷彩を着用している。・・・明日からは91式第3種夏服を着て来よう。

「はい。出席です」

たしかケトンだったか、あの教師は。

「ギターだ!! 誰だ今有機化合物群の名前をいつた奴は!! 何を言っているのだ私は・・・」

電波入ったな、今。

「ケトン殿!! じゅ「だからギターじゃボケエ!!」つぶあ!!」
なにか緊急の用件で教室に入ってきたコルベール先生が名前を間違えてケトンに殴られていた。

「なんかやばいな」

「そうか?」

「ギトン、目が据わってる。このままではコツパゲールが危険」

タバサまで・・・。

「よし。才人、スタングレネード!!」

「了解! 目と耳塞げ!!」

才人がM84スタングレネードのピンを外して本体をケトンの近くに投げる。

数秒後、100万カンデラの閃光と170デシベルの爆音が教室の前面から発生し、ケトンとコルベール、才人の注意を聞かなかった数名の生徒が昏倒した。

「まったく。名前を間違えたくらいで人を殴るとは、教師としてどうなのでしょうか? ギター殿」

「いやしかし・・・」

「あ、ここに来た用事を思い出しました。今日、この学院にアンリエツタ陛下が来校なさるので、全授業を中止し、校門前に集合しろとのことです。では生徒の諸君。テキパキと移動してください」

「・・・よつしゃああ???」

コルベール。今無視したよな? 周りは授業中止で舞い上がっている

のでギトーもよく考えていないようだけれども。

・・・それはそうと、アンリエッタか。俺ん中で唯一忘れてるキヤラだな。どんな奴だったっけ？ 緑髪のあいつではないし・・・ま、いいか。あとで見ればいいし。

それにしても数日前にテロリスト（便宜上そう呼ぶことにする）に襲われた学院に政府の最上級者が来るとは、愚かなのか肝が据わってるのか。念のため警備力をあげておくにこしたことはないな。

「ところでヒュウガとサイト。あなた達、その服はやめてくれないかしら。せめてなにか・・・普通の服にして頂戴」

ふむ。では・・・

ルイズは校門に直行し、俺と才人は着替えるために家に戻った。

「あ、秋本1佐。どうされたのでありますか？」

入ったとたん反応したのは安西2曹だ。

「服を替えに来たんだ。さすがに国家の要人を迎えるのに迷彩服じやまずいかと思つてな」

「国家の要人・・・ですか？」

ああ、そういや知らないのか。

「いや、今からこの国の姫さんがここに来るんだ。もし何かあったら応援たのむからな」

「了解です！」

気持ちのいい敬礼をして安西2曹は2階に上がっていった。

さて、選んだ服は陸上国防軍第1種礼装。外国の文武官との会合や、皇室との謁見のための最上級の制服である。そんなものがなんで輸送機に？と思うだろうが俺にもわからないんだ。説明しようがない。才人は俺とは別に無島学園学生自衛部隊の1種学生隊服を着用している。俺のとほとんど同じみしてくれだが、細かな部分で校章が入っていたり刺繍があつたり、ぱつと見以外ではずいぶんと違う。一応最上級の制服であるらしい。なぜこれが才人の手にあつたかというのと、先日手に入れた無島学園航空部隊のコブラの中に入っていたら

しいのだ。他にも才人の細々とした私物があつたそうだが、なぜあの中に入れてあつたのかは不明である。

着替えてしまったのでとりあえず迷彩服から2つのM84と9mm拳銃を取り出して装備し、念のため89式小銃（コルベール製減装弾装填済み）を肩にかけると小川さんたちを連れて外にでた。そして校門にて、

「あんたたち！！ そんなにいい服があるなら最初から着てなさい！！」

「いやこれは最上級の礼服だからそんな毎日着ているわけにもいかないのだが・・・」

「俺のもそうだ。それに学校じゃ大体迷彩服で通してたし」
「いや、それはそれでどうかしてるぞ？」

「まあいいわ。それにしても・・・よく・・・似合ってるわね」
「あ、ありがとう。」

ケツ、なにデレてやがる。っと、丘の向こうから豪華な馬車が見えてきた。

「才人。そろそろ姫さんが来るみたいだぞ。姿勢正せ。」
「り、了解」

「女王陛下の、御成り」
衛兵からおなじみの言葉が発せられると同時に、6頭立ての馬車が門をくぐった。周囲には王女が来校するとの知らせをどこからか聞き出したのか近くの村に住む農民が集まっている。こんなザル警備で大丈夫なのか？ほら、言ってる端から短銃を持った男が馬車に近づいて・・・
彘！？

「日向、あの男！」
「分かつてる！！」

腰から9mm拳銃を抜きとると人ごみを掻き分け、既に馬車の中から頭を出している姫さん・・・ああ、そう言えばあんな顔だったな・・・を狙っている男の頭に突きつける。前に手を回して男が持つ短

銃の撃鉄も抑え、一応これで銃は使えなくなった。

「動くな！！ 動いたら撃つ」

お決まりのセリフを言って引き金に若干力を入れる。

「何事だ！！ その男、銃を降ろせ！」

馬車の周辺に立っていた女性兵士が男に銃を向け、銃を降ろすよう催促する。既にこつちが動きを抑えてるから無理だし意味ないんだが。。。

「ほらよ。降ろさねえと撃ち殺されちまうぞ」

後頭部には俺の9mm拳銃。前には銃士隊・・・だったか？の単発の短銃。

逃げ場がなくなった男は銃を放りなげ、腰の剣を抜き銃士隊の隊員に斬りかかる。だが隊員は良く訓練されているらしく、その剣を短銃で受け止めると男の右足を払い、よろめいた男が取り落とした剣を足で蹴り飛ばして丸腰にし、他の隊員に拘束させた。

ただその隊員が見落としていることと言えば後ろから斬りかかってくる別の人影を捉えていなかったことぐらいだった。

俺はためらうことなく拳銃の引き金を絞ると男の手に握られた剣を銃弾ではじき飛ばした。

だが男はニヤリと笑うと

もう一方の手で剣を掴むと俺に斬りかかってきた。

「銃は一回しか使えないんだってな？」

そう言いながら。

「まさか」

もう一発発砲。グリップに桜が描かれた陸上国防軍の9mm拳銃は弾倉に9発、薬室内に1発の計10発を装填できる。さっきまでまさにその状態だったこの銃はさっきの一回を含め十回使えることになる。

驚いたのは男・・・と銃士隊だった。

「なんだ・・・と？ いつの間に装填を！？」

「ばかな！！ 連射ができる銃など聞いたこともない！！」

「まさか・・・地球から？」

最後は小さくてよく聞こえ無かったがなかなかの驚きぶりだ。

男の襟首を持って立ち上がらせると、銃士隊員からロープをもらって腕を拘束する。

「普通の銃じゃないことくらい形で分かるだろ。少しは疑えよ」

「秋本1佐！！何があつたのですか！！」

声のした方を見ると89式小銃を手にした小川さんとその部下たちが一般人を背に俺たちを取り囲む形で集まっていた。

「なんだ貴様らは！！この男の仲間か！！」

金髪の銃士隊員が拘束した2人の男たちを見て小川さんらに銃を向ける。こころなしか後ろに引いて仲間と円周防御の態勢になるうとしている。そりゃ迷彩服なんて見慣れない服を着た男たちが大勢で周りを取り囲んだらそうなるわな・・・じゃなくて、

「あ、それ俺の仲間です。すみません驚かせて。ほら、小川さんもそんな形相で取り囲んだら相手警戒しちゃうじゃないですか」

「ああ、これはすまない。で、なにがあつたのですか？」

「いや、ちよつとその男たちが銃を持って姫様の乗る馬車に押しかかるうとしてたから止めただけだ」

「はあ、あんま心配かけないでくださいよ」

「ああ、悪かったです。で、その銃士隊の方」

「・・・・・・・・・・」

「あなたですよ？」

「あ、いや、すまなかつた。私は銃士隊隊長のアニエス・シュバリエ・ド・ミランだ。アニエスとよんでくれて構わん」

「はあ。ではアニエスさん。はつきり言って屋外でこんなザル警備じゃ撃たれてもしょうがありません。今すぐ屋内に移るか姫さんを安全な場所に移動させた方がいいでしょう」

「君は一体何者だ？助けてくれたのはありがたいが正体が分からない事には安心できないのだが」

「すみませんでした。俺と才人はこの世界に使い魔として召喚され

た異世界の軍人で、小川さんたちは理由は分かりませんが、いきなりここに飛ばされてきた俺たちと同じ世界の軍人です」

確か原作じゃあ身近な人以外には東方のロバ・・・何とか出身と名乗っていたはずだがいろいろと不便そうなので事実を述べておく。ア二エスさんは信用に足る人物だったはずだしな。

「ふん。まあ正直でいいことだ。日本国陸上国防軍の軍人だな？」

「はい。・・・え？」

「私はトリステイン銃士隊隊長で、元アメリカ陸軍第1機甲師団第77機甲連隊第8戦車小隊『リリー』隊長、ア二エス・ミラン中尉だ。ここにいる銃士隊は全員私の部下だ。もちろんアメリカ陸軍のな」

「うそだろ・・・」

良く見れば銃士隊隊員は皆鎧の下に抗弾ベストを着てやたらポケットが多いズボンに現代の軍用ブーツといういかにも現代の兵士という面影を残している。

「探せば地球の軍人・・・かなりいるのかもしれない」

数日前の中国軍人といい小川さんたちといい才人の兄貴といい目の前のアメリカ軍人といいこれまでに会った地球人は皆軍人じゃないか！！ まあ素人じゃないから仲間に引き込むのも楽なのだが・・・

「なにをブツブツ言っているのだ。我々はそろそろ動かないと陛下から叱られてしまうのだが・・・」

「すみませんね。じゃあ休憩のときでいいので俺たちの家に来てもらえますか？ 詳しく話を聞きたいので」

「ああ、分かった。時間が開いたら伺おう」

「よし。ミシエル、周囲を警戒しろ！！ 予定は変更。周囲に人はあまり近付けるな。即時宿泊部屋へ撤退する！！」

「了解！！ 対戦車班は撤収！！ 陛下近辺護衛へ戻れ。狙撃班は現場待機。動きがあつたら知らせろ」

狙撃班とか・・・対戦車班まで配置してやがったのか・・・。つて

か狙撃班がいたならあの男たちも十分対処できただろうに。

「あなたが射線上にいたからですよ」

「すみませんでした!!!」

十数分後、M24対人狙撃銃やカールグスタフ、M82A2対物狙撃銃を抱えた銃士隊員が屋上から降りてきた。姫さんが部屋に入ったので数人の見張りを残して撤収を始めたのだ。銃や隊員らを注視すると、やけに傷だらけな銃身や、ほとんど弾薬の入っていない軽機関銃を肩から下げる隊員もいる。

「まるで戦国自衛隊だな」

「懐かしいな、その映画。弾薬切れで細々とした戦闘しかできないだろうからな。交渉・提供するなら弾薬か燃料が一番か。運が良ければ王都にも戦車があるかも知れないぞ？」

気づけば、姫さんを学院に迎えたその日の午前中は出迎えだけで潰れてしまっていた。

意外な仲間（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

*アメリカ陸軍第1機甲師団第77機甲連隊第8戦車小队『リリー』は架空の女性部隊です。誤解のなきようお願い申し上げます。

アニメスの異世界転移録（前書き）

ほとんどがアニメスサイドです。

長くなりそうなので途中で切ることになりました。

アニエスの異世界転移録

昼食を終えた後、俺は滑走路脇の家で小川さんたちと一緒に大量にある銃器の整備をしていた。大量にあるせいで未だ手つかずの状態の銃が多かったのである。才人には安西2曹と一緒に水汲みと捲き割りに出かけてもらっている。

整備が一番使うであろう89式小銃や64式小銃などのアサルトライフル、MINIMIやM2などの機関銃を中心に進め、ようやくその全てを終わらせた時は午後3時を回っていた。まだ手をつけていないAK47などの東側火器を含めたら、1日あっても足りないだろう。

(言ってしまうえば東側火器は俺たちが持っているNATO弾との互換性が皆無なのでほとんど整備必要はない)

コンコンッ

お、ようやく来たようだな。

「はい」

「アニエスだ」

「ああ、どうぞ入って下さい」

木製のドアを開けてアニエス中尉を中に招き入れる。さっきまで銃器が山ほど置いてあったテーブルに着かせ、緑茶を出す。

「そう言えば自己紹介がまだでしたね。私は日本国陸上国防軍富士340輸送飛行隊隊長、秋本日向1等陸佐です。よろしく、アニエス中尉」

「し、失礼しました!!!」

「え? どうしたんですか?」

「あまりにも若く見えたので、てっきり私より階級が下だと思っていた次第で・・・た、タメ口で話してしまった無礼、お許しください!!!」

「え、ああ。そのことか。別に気にしなくてもかまわないよ。そん

なこといちいち気にしてたらこの世界でやってけないし。それに才人なんて……。あ、あと私は若く見えても55歳だからあんまり若い世代の話されても困るからね」

「その見た目で55歳・・・信じられない……。あ、いやほんとにすみませんでした」

「気にしないでください。それで、あなたはいつからこの世界に？」

「はい。この世界に来たのは約7年ほど前になります」

「7年前!？」

「なにか？」

「いえ、こちらの話です」

俺の考えていることが当たっているなら・・・

7年前の『アメリカ海軍輸送艦消失事件』に何らかの関係があるに違いない。

アニエスは緑茶を一口飲んでから話し出した。

2018年11月8日

「第1機甲師団第77機甲連隊所属、第8戦車小隊『リリー』隊長、アニエス・ミラン中尉!!」

「はっ!!」

「貴官ら以下15名には国連朝鮮半島遠征軍への参加を任ずる。装備品はM1A2エイブラムズ。加えて自衛戦闘に必要な火器類である。出征は明日1000時。幸運を祈る」

「礼!!」

「ありがとうございます」

1時間前にもらった辞令を携え、我が小隊の戦車が鎮座する格納庫へ向かう。先程まで整備が行われていた格納庫内は、油のにおいがしみ込んだ独特の臭いがするが、私はこの臭いは嫌いではない。

「あ、ア二エス隊長!!」
横一列に並ぶ5両の戦車を見ていると、その内の一つから声意をかけた。

「む、ミシエルか。たった今辞令を受け取った。見るか?」

ミシエルとは私の部下であり昔からの友人だ。階級が同じ中尉ということもあり任務以外じゃタメで話すのが常だ。

ミシエルは戦車から飛び降りるところらへ駆け寄って辞令書を掻っ攫った。

「あーとうとう出兵か」

「どうした。そんなに出兵が嫌か?」

「別に嫌なわけじゃないですけど……。でも歩兵連隊も付けなくて私たち戦車小隊だけでどうしろと?」

辞令書の小さい部分を指差しながら質問される。自分も不満に思うことだからうまく答えられない。

「日本の10式戦車と歩兵戦闘車も同伴だそうだ。護衛はそれに任せるしかあるまい」

「日本の国防軍が前の戦争で強いつてのは分かりましたけど……。自国の兵士は自国で守ってほしいっていうか……。昔の日本の自衛隊は他国の軍隊に護衛を頼んだみたいですけど」

私の小隊、『リリー』はその名の通り百合をあしらった小隊旗を掲げる戦車5両、人員15名の戦車部隊である。装備車輛は旧式化の進むM1A2エイブラムズ。日本の小型軽量ながら世界最強の異名を持つ優秀な10式戦車と比べるとどうしても見劣りしてしまう。

「でもなんで77機連からの出兵は我々だけなのだろうな。アメリカ主体の国連軍なのだから1連隊位投入してもよさそうなものを」

「上の判断ってやつなんじゃないですかあ? バカ高い戦車を浪費する部隊は旧式装備を持つ部隊だけいい……。って」

実は私たちの所属する第1機甲師団の中で、M1A2を使っているのは77機連第8戦車小隊だけなのだ。2015年代に入り新しく

配備され始めたM1A3を使う部隊がほとんどなのである。A2より各段に進歩したC4Iと射撃安定装置、油圧姿勢制御。巷では日本からの技術提供を受けて完成したとの噂もある（それでも戦後世代の10式戦車は世界最強なのだが）。

「何はともあれ出立は明日だ。必要なものだけ準備しとけよ。それで今日の1500時に格納庫前に集合、装備の積み込みを始める。皆に伝えておいてくれ」

「了解」

ミシエルは軽く肯定の意を表すとさっさと兵舎へ向かって行ってしまった。

「さて。私も準備しておくか」

出兵の間はずっと戦闘服になるため普段着は持たない事になる。上下迷彩服を4着ずつと下着を十枚前後。後は戦闘用の抗弾ベストだったり弾帯、ブーツだったりするので基本はこれでOKである。

ミシエルには言いそびれたが今回の戦車小隊派遣では荷物・弾薬・携行兵器運搬のためにM1134ストライカーATGM装甲車が随伴する。2連装TOW対戦車ミサイル発射機を搭載するこの装甲車は有名なストライカー旅団戦闘団の戦車小隊にも配備されていたタイプで、装甲に不安はあるものの比較的遠距離からの攻撃能力を持っているため、戦闘中は後方支援に回ってもらえればいい。

そんなことを考えているうちに集合の1500時が迫り、ポツポツと部下たちが現れ始めた。

「えー、ミシエルから聞いているかと思うが我々は今日付けで戦地、朝鮮半島へ向かうことになった。派遣部隊は我々77機連第8戦車小隊と物資運搬のストライカー装甲車2両だ。任務内容はキャンプ周辺の威力警戒、及び歩兵部隊の前線までの護衛と前線での戦闘だ。内容を見る限り必ず戦闘に遭遇することになる。派遣される基地には弾薬はあるが銃本体は少なく我々に貸与できる装備はないそうだ。そのため身を守る武器弾薬は大量に・・・限度はあるが・・・持つ

ていくことが許された。今日集まってもらったのはそれら武器弾薬の選別と荷物の積みこみをするためである。明日0200時からトレーラでの輸送が始まるため、余裕を持ってやりたいと思う。質問は？」

「すぐさま何人かの手が上がり頭の整理ができていない奴はいないよ。うだと安心する。」

「ではアンナ」

「はい。朝鮮半島への派遣期間はどのくらいになるのでしょうか」

「そうだな。実際には分からないがこの戦争自体あと1カ月は続かないだろう。だから1カ月未満との考えが妥当かもしれない。戦争終了後は戦車などに用はないだろう。他には？ 無いか。では武装の選別に入ろう」

その後1時間の間皆であーだこーだ言いながら選んだ武装はM4カービンが予備含めて18丁、M249MINIMI軽機関銃が4丁、カールグスタフを2基（弾頭別）、M72LAWを2基、M24対人狙撃銃3丁、M84A2対物狙撃銃1丁、個人携行火器 PDF としてMP5を5丁、M9ハンドガンを18丁だった。大部分をストライカー装甲車に積み込むとして、M9は各自身に付け、MP5は各戦車に1丁ずつ置いておくことにした。

そして十数時間後・・・私たちはそうとは知らずアメリカ合衆国本土と永遠の別れをしたのだった。

2018年11月13日

高速輸送艦のおかげで朝鮮半島までの短い航海は日本国防軍の強襲揚陸艦、戦艦（世界で唯一日本だけが保有）、護衛艦、空母とも合流し、数日で終わった。荷降ろしのため輸送艦乗組員の半分が上陸し、艦長を含む士官が報告のため臨時司令部へ向かった。今この艦に乗っているのは私たち戦車小隊と、操艦するために必要な最低限の乗組員しかいない状態だ。荷降ろしの順番も私達が最後なのでまだ待たなくてはならない。

ただ戦車の中で待つのも嫌だったので甲板に出て港の様子を眺める。後ろでは甲板にあげられてきたA H - 6 4 D ロングボウ・アパッチ戦闘ヘリとC H - 4 7 G チヌーク輸送ヘリが離艦しようとエンジンの回転数をあげていた。だがその時、異変が起こった。突然パチパチッといった音が聞こえたかと思うと金属が金属を擦るような音が辺りに響いたのだ。はじめはヘリの故障かと思った。ヘリの誘導をしていた士官もそう思ったらしく慌ててエンジンを止めるよう指示する。だがそれを止めてもなお？音 は響き続け・・・一瞬で頭が真っ白になり、意識が途絶えた。

アニメスの異世界転移録（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

こんにちは。

前話で長くなりそうといっときながら全然長くねえです。はい。

ではどうぞ

気がつくとは私は艦内の医務室に寝かされていた。首を動かして周りを見ると同じように気絶したと思われる人がベッドに寝かされていた。

「隊長、気づかれましたか」

隣にはミシエルが立っていた。

「なんだ、一体何があつたんだ」

「現状は不明です。分かっているのは我々が荷降ろしのために艦を横付けにした埠頭がコ鬱然と消え、この艦が海のと真ん中を漂っていたということだけです」

「他の隊員は無事か？」

「ええ。気絶したものもいますが既に立ち直っています」

「どうやら目覚めが悪かったのは私だけらしい。恥ずかしいな」

「でも大変ですよ。この艦に残つた海軍乗員が25人しかいなくて。そもそも今この艦にいるのが全部で50人。航海中は120人もいたのに」

「そんなんで動かせるのか・・・？ この艦は？」

「揚陸艇の乗員も招集掛けて頑張ってるみたいです。私も手伝おうとしたんですけど邪魔者扱いされて・・・」

「そうか。それじゃまず格納庫に行こう」

「そうですね」

そう言つて立ち上がるうとしたとき後ろから海軍の乗員が近づいてきた。

「すみません、アニメス中尉ですか？」

「はい。そうですか」

「移動のところすみませんが緊急の会議を開きますので士官会議室に移っていただけますか？」

拒否する言われもないので快く承諾する。

「お前もいくか？」

「はい」

ついでなのでミシエルも連れていく事にする。

「陸軍中尉、アニエス、ミシエル、入ります」

声をかけてから室内に入る。中には艦内の各科の最上級者と思われる人物が十数人長机に腰掛けていた。

「全員集まったようなのでこれから緊急会議を始めさせていただきます。司会は私、バレーグ・ゲインが取らせて頂きます。本題ですが、本日我々海軍、陸軍含む58名と物資を積み込んだ本輸送艦『オストラント』はGPS、衛星通信の使用不能な海域に飛ばされたことを確認した。現在、幸いにも本艦に積載されていたままのAH-64Dを使用し、周辺の調査をしてもらっているが、今のところ新たな情報は入ってきていない。奇跡的に員数外の物資と乗員の減少により、食糧の不安はないものとしておく。そのうえでこれからの事を話し合ってもらいたい」

「もし我々を攻撃する意思を持つ者であってしまった場合どうするとの考えでしょうか？」

「攻撃の意思があるものに対しては、攻撃するしか手はないと思っております。幸いこの艦には戦闘ヘリが積載されていますし、CIWSとSAM発射装置もあります。もし竜が現れたとしても撃墜は簡単でしょう」

八八ハツと笑いが広がり、それまで緊張で固まっていた空気が和やかに戻ってきた。だがそれも次の艦内放送で再び固まってしまう。

『偵察活動中のアパッチが未知の飛行物体と遭遇し、攻撃を受けました!!! 映像での確認を行ったところ・・・その・・・』

「どうした？ 飛行物体の内容は？」

『・・・大型の鳥類とみられる生物でした。しかし地球上であるような生物は聞いたことはありません』

「まさか・・・本当に竜なのか・・・？ っ！ 直ちにアパッチを本艦に帰投させる!!! 対空戦闘用意!!!」

「総員対空戦闘配置!!! 逃げ!!!」

艦長が命令すると会議室に集まっていた海軍の乗組員は皆一斉に立ち上がると銘々の管轄へと駆けていった。

「陸軍の方々はしばらく待機をお願いします」

私は何か手伝おうとしたが海軍の兵器管制に関しては素人であり、逆に迷惑になるだろうと思い、踏みとどまった。

強襲揚陸艦「オストラント」簡易CIC

「アパッチ、本艦まであと3分」

「追跡目標は6機、本艦との相対速度は約200ノット(約370km/h)!!」

「対空戦闘、第1甲板上ESSM 発展型シースパロー 発射装置スタンバイ!!」

「ESSM、スタンバイ!」

「目標有効射程圏内に到達。ESSM、ファイア!!」
「ファイア!」

発射管制員が手元のパネルスイッチを押しこむと、艦首甲板に設置された8連装ESSM発射機から3発の対空ミサイルが発射された。目標6機に対し3発しか撃たないのは単に射撃管制装置の性能が悪いからである。いや、強襲揚陸艦としては比較的良好な性能であるといえよう。戦闘艦では無い強襲揚陸艦は常に護衛艦が付いていることが想定されているため、高価な高性能レーダーを搭載しない傾向があるのだ。

「目標到達まで20秒・・・10秒・・・着弾!」

「目標2機撃墜! 後20秒で主砲射程内に到達!」

「避けられたか・・・。127mm砲スタンバイ」

「アパッチ、本艦上空に到達。収容します」

甲板上を写すカメラにはテイルローター付近に大きな焦げ跡を残したアパッチがふらふらと着艦しようとしていた。

「主砲、ファイア!!! 撃ち落とせ!!!」

無人のOTTOメララ製、127mm単装速射砲が毎分十数発の速度で砲弾を撃ち出す。使用弾種は近接信管を備えた対空砲弾である。時速400キロそこそこの敵は次々に砲弾の餌食になり、海へと落ちて行つた。

「その数日後にこの国の大使が艦上にやってきて撃墜したのが当時の敵国の偵察隊だということが分かつたのだ。異世界にいることを知つた我々はこの世界で生き残るためにトリスティンと協力し、戦争に介入したのだ。結局停戦になつたがな」
アニエスはそう言つて話を締めくくつた。

「そつたのか。少し説明が中途半端な気がするがそれは外の世界の都合なのだろう。」

「では今、その輸送艦はどこに？」

「新しく港に作つてもらつたドックで定期点検をしている。一部で対空ミサイルの代替物の開発も始まつている。私達の戦車は今王宮に一時置かせてもらつている」

ドックで点検か……。艦名が「オストラント」だしコルベル先生がやればいろんな魔改造が可能かも……。いやこれはまた今度にしよう。

「弾薬などの提供は必要ですか？」

「いえ。今のところ艦に戻ればいつでも補給ができますので。お気持ち感謝します」

「ああ、そうですね。では部屋まで送りましょう。もう外も暗いですし」

「ありがた……しまった！！ 護衛の交替時間が！！ すみません急いで帰らなくてはならないのでこれで！！ 失礼しました！！」
俺たちがあつげにとられている間にアニエスは姫様の元へと走つて

行ってしまった。

「広間に飯でも食いに行くか・・・」

「ただいま〜。あれ？ 日向、アニスさんは？」

「帰ったよ。飯行こうぜ、小川さんたちも」

「そうだな（ですね）」

薪割りに行っていた才人と安西2曹だけが訳も分からずさっさと家を出た俺たちに付いてきた。

「今日は厨房に行ってみるか」

「そうですね」

UH-60Jを手に入れてからの間、俺たちは何度か厨房に顔を出してコック長のマルトーさんと仲良くなり、とある機会に地球から持ってきた缶飯を見せるとしきりに驚いていたのを思い出す。そうこうしているうちに学院本校舎にずいぶん近づいた。

「おい。なんだあれ？」

宝物庫の等のそばになにか大きな物体が鎮座している。よく見るとその上には小さな人影があり何やら宝物庫の壁に工作をしている。

「泥棒？」

そう呟いた時、巨大な物体の上に立つ人影と目があった・・・ような気がした。

「気付かれた!!! 逃げろ!!!」

勘だったのだが合っていたようだ。その直後巨大な岩が俺たちに向けて落とされてきたのだ。

「つたくなんだってんだよ!!!」

俺と小川さんは方に掛けていた89式小銃を構えると物陰に隠れて魔法を使っているであろう人に向けて発砲する。ただ小銃を持っていたのは俺と小川さんだけなので残りの隊員は全員9mm拳銃での応戦だ。なので・・・

「やばっ、弾切れた・・・」

「俺もです」

「糞!!! おい才人!!! お前走って家からLAW取ってこい!!!」

「急げ!!」

「了解!!」

LAWとはM72 LAW対戦車ロケットのことだ。現代では半ば威力不足であるが、原作では才人がこれでゴーレムを撃破している。余裕で粉砕できるだろう。

数分後、89式小銃だけで応戦を続け、その弾も切れた俺たちはグレネードを使って牽制を続けている。まったく、衛兵はほんと何やってんだか……。

「みんな伏せる!」

急にかかったその声に皆一瞬で反応する。

シユパツという音とともに発射筒から飛び出したM72 LAWは真っ直ぐゴーレムに突き刺さり、轟音とともに爆発四散した。当然ゴーレムもバラバラだ。

「ふう。助かったぜい」

「つてかあいつなにやってたんだ?」

「さあな。とりあえず才人、学院長呼んで来い」

「呼んだかの?」

「ああ、学院長。いらしたのですね。学院内にいた不審者からの攻撃を受け、正当防衛として撃破しました」

「分かっておる。宝物庫を確認したところ君たちには見せていない更に地下にある倉庫のものが盗まれておった。残されていた書き置きからも、あやつは土呉のフーケという盗人とみて間違いないじゃないだろう」

「盗まれたものとは?」

「聞いていいものか迷ったがこの流れからして取り戻しに動くのは俺たちだろうと読めたので聞いておく事にした」

「サイト君のお兄さんが持っていたエロゲーというものじゃ」

「……それは大変だ!!」

反応したのは才人と柴木2尉、金剛3尉である。決して俺ではない事を明記しておく。

「秋本1佐。すぐに取り戻しに行かないと!!」

「お、小川さんまで・・・」

内心この4人に辟易しながらも学院長にどうすればいいか念のため聞いておく。

「すまないが・・・」

翌日、俺たちはロングビルさんとともに馬車・・・いやUH-60

J ブラックホーク に揺られて“森の中の小屋”へ向かっていた。

・・・そこまでしてエロゲー取り戻したいのかよ。

迷彩服に防弾ベスト、タクティカルベスト。肩に89式小銃、背中にLAW。完全武装した小川さんの向こう側に広がる空には柴木2尉の操縦するAH-1SD コブラ改 がこれまた完全装備で飛行しているのだった。

12月5日から再び定期テストのため更新はそれ以後になると思われます。

ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8049n/>

ゼロの使い魔～真のガンダールヴ～

2011年11月24日01時45分発行